東方適応志

箪笥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方適応志

【Ｎコード】
Ｎ４８３７Ｎ

【作者名】
箪笥

【あらすじ】
ちょっとしたことから大昔の東方の世界に行ってしまう少年のお話

注意書き

どうも、おはようございます　こんにちは　こんばんは
この小説を書かせてもらう箪笥と申します。

この小説を読むに当たって注意してもらいたいことがあります。それは

オリキャラあり　原作崩壊　キャラ崩壊　駄文　更新不定期
東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作　主人公最強系　俺設定満載

上のものが苦手な方は戻ることをお勧めいたします。

だとということです。
「そんなのどんどんバッチコーイ」な人は見ていただくとうれしいです。
それでは本編どうぞー。東方適応志（とうほうてきおうし）です。

第一話　～異世界そして人間卒業？～

いま僕は知らない森にいる。
「どこだ？ここ」と、とりあえず素数を数えて落ち着こう
「１　２　３　５　７　１１・・・・・」
ってそんなことをしている場合じゃねぇ　それに１は素数じゃねぇ
どうしてこうなったか思い出そう

時　数十分前に戻る――――

「暇だ・・・・」そう思ったのでなんとなく山に向かった。ここは家族との思い出の場所なのだ。
この辺は一般的に田舎といわれる場所なので山が多くあり、出入りが簡単なのだ。その山道を歩いていると・・・
「こんなのあったか？」大きい洞窟があった。
なんとなく興味がわいたので入ってみることにした。
しばらく進んでいると一瞬地響きがしたと同時に出口と見られる光が見えた。
そこをでると――――――

現在に至るわけである

つまり洞窟をでたらここにいたわけだ。
「じゃあどうくつをひきかえせば・・・」
その言葉を言い終わる前に僕はその光景に絶句した。文字通り言葉が出なかった
振り向くとそこには洞窟ではなく大きな壁があのだ。
そう洞窟「だった」場所はなくなり、かわりに「壁」があった・・・

「できないことに焦っても仕方ない　とりあえず動こう」
もともと細かいことは気にしない性格なので近くに町がないか探すことにした
視界が悪いが目はいいほうなので何とかなるだろう。

しばらく歩くと人（仮）を見つけた
え？なぜ（仮）だって？そりゃあ額に角をつけている人なんて、少なくとも俺は見たことがない。それに格好からするとありゃ鬼か？もしかしたらとんでもない大昔か異世界に来てしまったらしい。何だよ鬼って。
いくらなんでも無理があるだろ。
まさかマジで異世界か？だったら帰れる場所探さないと。

「誰だお前　この辺では見ん顔だな　人間か？」

やべぇ、鬼（？）が話しかけてきた　どうする？適当にごまかせる相手じゃないし

「まあ妖怪か人間かは戦えばわかるか」

まずいぞ　あいつ殺るき満々だ適当に返事をしないと・・・
「いや俺は人間だ。気がついたらここにいた」

「ハッハッハ　なかなか面白いことを言う人間だな」

「いや、嘘はついていない。そうだ一つ質問いいか？」

「そうだな俺に勝ったら質問を受けてやろう。行くぞ！」

いやいやいや　ヤバイヤバイって　鬼に勝てだって？クソッ　逃げるしかねぇ
鬼の攻撃を紙一重でかわす。が、勢いあまって転んでしまった
「ほう、かわすとは人間にしてはやるな　どんどん行くぞ！」
まずい　転んで動けない　鬼はどんどん近づいてきているってのに・・・！
鬼が手を大きく振りかぶる！
嫌だ
嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ
死にたくない
死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない

こんなところで死んでたまるかあああああ

体の中で何かがはじけたような気がした。それから何秒たっただろうか。もしかしたら1秒も起っていなかったかもしれない。だがいつまでたっても痛みがこない。その上、体の周りに何かが取り巻いているような気がする。
恐る恐る目を開けると数m吹っ飛んだ鬼がいた

「むぅ・・・能力か、厄介だな。仕方ないあきらめるとしよう」

へ？よくわからないが諦めてくれるみたいだ。そうだ今なら質問聞いてくれるか？
「なら質問いいか？」

「約束だ　いいだろう　何の質問だ？」

「ここは日本か？　それと能力って何だ？」

「面白いことを聞く人間だな　日本と言うのは聞いたことはないがここは人間からは妖怪の山といわれてる。能力っていうのは　今お前が使った技みたいなもの　体中に風がとりまいているだろ？」

本当だ　体を取り巻いていたのは風だ
「本当だ・・・」

「その反応からすると今回が初発動か　能力は持つものによって違うからな」

さっきの言葉からすると彼は能力持ちではないみたいだな

「じゃあ俺は行くとするか　また縁があれは会おう」

そういうと鬼は去って行った　できればもう会いたくないな・・・

「能力・・・か　これからどうするかねぇ」

妖怪の山って言うぐらいだ、このままだとまた妖怪とあうだろう。

とりあえず山を下ろう

運良く（？）山を下りきるまで妖怪にはあわなかった。

さらに誰も使っていない洞穴を見つけた。誰が作ったか知らんが有効活用させてもらおう

「眠い　今日はもう寝よう・・・」

ちょうど日が沈みかけている　明日から食料の確保やら大変そうだ・・・

○

鬼との遭遇から約１０年。え？ぶっ飛びすぎじゃないかって？人生そんなモンです。

またその生活の中で気になったことが２つある。
一つ目は「能力」が進化して（？）炎やら電気やら水やらも使うことができるようになったこと。
二つ目は１０年もたったのに自分の容姿が変化していないこと。
前者はいいのだが、後者は困る。
なぜなら２５歳なのに中学２年と同じぐらいの身長って怪しくないか？
そもそも身長が伸びない＝人間のような成長ができていない＝人間卒業おめでとう！
なんてことになってるかもしれないからだ。ここがもといた世界ならそんなことを考えないのいのだが居る世界が世界だからな・・・

人外になってる可能性はなくないのでここ１０年のうち妖怪に関係したことを思い出すことにした。
うーん　そこら辺のキノコやら木の実やらを食べたからか？
それは無いだろう。食べたら妖怪化する食べ物なんて聞いたことが無い。

それとも能力を使いすぎたからか？（主にＶＳ妖怪戦などで）
それも無い。能力を使ったら疲れはしたがその他に変なことはおこ

らなかった。

能力で人間に悪戯したからとか？
妖怪は人間を襲ったりすると体力が回復したりするとか聞いたことはあるが、悪戯するだけで妖怪になってたら大変なことになる。

そもそも能力をもてるのが妖怪だけとか？
んー　それも無いかな。１０年前の鬼も人間とわかっていながら能力の説明をしてくれたからな。

それとも空腹に耐えかね妖怪の肉を食ったからか？↑ダウト

・・・・・・思いっきり最後のじゃねーか！
あの時は３０分ほど体中が痛んだが何とかなったんだよな・・・

つまりいまの状況を整理すると
・異次元に来て１０年目
・２５歳だが中２と同じぐらいの体格
・人間卒業（妖怪化）おめでとうの可能性がある
・洞穴生活

といった感じだ。
それにしてもこっちに来てもう１０年か・・・向こうでは俺の存在はどうなっているのだろうか。
友達は心配しているのだろうか？妹は元気に生活しているのか？それとももう忘れてしまっているだろうか？それとも居なかったことになっているのか？
存在的には失踪になっているのだろうか？誘拐とみなされ調査されているのだろうか？
妖怪は居るし、生活はしにくいしで、すこし前までは元の世界に帰

りたいなんて思っていたが、
今ではこっちの世界に居たいとまで思っている。１０年の間でそんなにも変わるものなのだろうか？
自分の心と言うものがわからない。

しかしこのまま考えながら洞穴に閉じこもっていても暇なだけだ。
せっかく異世界に来たのだから楽しもう。
「よし。明日の朝の訪れとともにここから旅立とう」

あての無い旅、つまり今までの世界ではできなかった夢である放浪の旅ってやつだ。
いろいろな妖怪に遭遇したり、食料に困ったり、いろいろ大変だろうがそれが旅の醍醐味である。
と、俺は思っている。

しかし何で他の人間とまったく接触してないのに精神崩壊を起こさないのか？
妖怪化したからか？でも妖怪も人にかかわらないと力が衰えていくってどっかで聞いたような・・・・・
まあ細かいことを気にしたらだめだな。今日はもう寝よう。

そして４０年の放浪の旅をして住み着いた場所で起きることなど、
まだ俺は知る由も無いだろう。

第2話　～放浪のたび時々月人～

旅を始めて約４０年たった。え？だから飛びすぎだって？人生そんなもん（ｒｙ
このたびでわかったことがいくつかある。修行をしていたと妖力やらが見えるようになった。
元人間ということか　自分の体から妖力のほかに霊力も見ることができた。

そして何よりもよかったことは自分の能力がわかったことである。
その能力とは

「風・火・水・原子を操り発電する程度の能力」である。

まだあるようなのだがそれらはまだわからない。
能力名を聞いてピンと来ない人は発電機見たいな感じに思ってくれればいい。
そしてこの能力で一番うれしいことは「程度の能力」であること。
なに？まだよくわからない？程度の能力といったらあれしかないだろ！
そう「東方Ｐｒｏｊｅｃｔ」の世界なのである。つまり八雲紫やら博麗霊夢がいる世界なのである。

つまり簡潔に言うと「幻想入り」したのだ（ただし幻想卿ができる前のようだが）
そうとなれば原作キャラに会いたいのだが相当昔のようなのでまずあえないだろう。
なので東方のことは少し置いておこう。

そして今、俺がいる場所なのだがとある村の近くの洞穴だ。そこで注目してほしいのは洞穴ではなく村なのだ
ここに住み着いたのは１０年前　住み着いた当時こそ、村人は自作した槍で狩をする程度だったのだが、それから2．３年で土器を作り始めるわ米の栽培をはじめるわをしている。明らかに時代の進み方おかしいだろ！
と突っ込みたくなるのだがそれはおいておこう。俺はここまで急発達する文明はしらないが、大昔で、歴史に残らずここまで発展した人類は多分、後の月人（蓬莱人）だろう。東方の世界みたいだし。
そして月人（蓬莱人）といえば「八意　永琳　」と「蓬莱山　輝夜　」である。

今すぐ会いたいものだが今乗り込んでも敵対視されるだろう。それは避けたい。（幻想郷完成後的に考えて）
というわけで修行をしながらその村を見守ることにした。
因みに修行内容は秘密だ。そう簡単に話したら面白くないしな。

それから半年ほどたったがその町（発展して平安京レベルの町になった）には俺の能力の一部の「電気」というものはまだ無い。
というわけであるいたずらを仕掛けることにした。
弱めの電気である静電気をおこすもの、つまりエレキテルを町において逃げるというものである。

え？どうやってパーツを集めたかって？もちろん俺の能力だよ。俺の能力の一部である原子。
じつは元素も操れる事が発覚したのだ。自分で創った元素を集め形にする。それでガラスやらを集めたわけだ。
フフフ　どうなるか楽しみだ　町人の諸君また１ヵ月後に会おう！

○

エレキテルを仕掛けてからきっかり１ヵ月たったわけだが・・・
「い、今　目にしたことをありのままはなすぜ！
エレキテルを悪戯で仕掛けたら１ヶ月で平安京が昭和後半の都市レベルまで発展していた。
な、何を言っているかわからねぇと思うが、俺も何が起こったか理解できなかった。
発展とか、高度経済成長とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねぇもっと恐ろしいものの片鱗をあじわったぜ・・・・」

そう、上の言葉でわかるようにどういうわけか平安京レベルだった町が昭和後半の都市レベルまで発展している。
いくらなんでも静電気の起こし方をしってもここまで発展せんだろう・・・
これが月人（予定）の力なのか？怖い、怖すぎるぞ月人（予（ｒｙ）
まあ、月の頭脳といわれる永琳がいるならこの発展もまだ理解できる。理解したくないが
とりあえず今日はもう帰ろう。この発展のしようをみたら疲れてきた。寝よう・・・・

○

エレキテルを設置してから約１００年がたった。え？だから早いっ

て？人（ｒｙ
相変わらず都市は発展し続けて平成のような都市になっていた。
さらに火器などの武器を作り妖怪への警戒態勢も強まってきた。そのため永琳たちに会うのが難しくなってきた。

などと考えていると洞穴の入り口あたりに人間が入ってくるのを感じた。一応妖力を隠し警戒しておく。
人間が視界に入ってくる。赤と青の少し変わった服、赤い十字の入った青いナース帽。銀色の髪、
どこからどう見ても永琳さんです。本当に（ｒｙ
まさか会いたい人物が自分から来てくれるなんて俺はラッキーなようだ。
その顔を見ると妖怪に追われているところを洞穴を見つけたらまた妖怪（俺）がいたってところだろう。

「どうした人間？妖怪に追われてここに来たのだろう？」
俺が彼女を知っていることがバレると面倒なので隠しておく。

「・・・・・あなたは妖怪でしょ？」

なぜ自分を襲わないのか？と不思議な顔をしている。

「ああ、俺は妖怪だ。だが人は襲わん」

「なぜ？」

「なんとなく・・・だ。それよりそこに隠れてろ」
永琳は岩の影に隠れる。それと同時に洞穴に半人半馬の妖怪が入ってくる。

「お前。ここに人間が来なかったか？」

「生憎だがお前に答える口など持ち合わせていない」
きっぱり答える。

「なんだと！？」
妖怪が怒って飛び掛ってくる。俺が手をかざすと妖怪は地面にたたきつけられる。妖怪はそれならとばかりに口から火を吐く。

「ふん　その程度か」
俺は水を作り消火する。そのままその水をすごい勢いで飛ばす（某モンスターのハイ〇ロポ〇プのような感じ）妖怪は吹き飛び壁に当たる。
当然そのチャンスを逃すわけも無くそこに雷をぶち込む。相手は水でぬれているので電気をよく通す。妖怪は黒こげになって倒れていた。

「二度と俺の領域に立ち入るな。」
俺がそう呟く。もっとも、もう動けないんだが。

すると岩陰から永琳が出てくる。
「あなた本当に妖怪？」

「なぜそう思う？」

「だって人を助ける妖怪なんて聞いたことないわ」

「フフッ　そうかもな。そうだ。町のことを詳しく教えてくれないか？もう２００年ほどまともに話をしてないんだ。それがお礼って

ことで頼む。」

「・・・本当におかしな妖怪ね。いいわよ」

それから1時間ほど町の話を聞いた。科学力が発達しすぎていること。月に移住することが決定したこと。
そして月に行くことに関して妖怪を絶滅させて地上に残る派と月に移住派で分かれていること。
永琳は月移住派らしい。月移住派の中には妖怪と戦うぐらいなら月へ行くというものもいるそうだ。
まあ人間と妖怪の全面戦争になるなら中立の立場に立たせてもらうことにしよう。

「長い間話に付き合ってくれてありがとう。」

「いえいえ、私もあなたとは気が会いそうだわ。でももうすぐお別れね。」

「なあに　生きていればまた会えるさ」

「そうね。　えーと、まだ名前を聞いてなかったわね。私は八意永琳。あなたは？」

「俺の名前は・・・」
さーてここで問題が発生した。こちらでの名前を考えるのを忘れてたぜ。何？前の名前使えばいい？折角異世界に来たのだから過去との決別の意味を含めて名前を変えたい。
そうだな・・・・・俺は異界人だからそれを少し変えて、異界（いかい）　塵（じん）。神じゃなくて塵なのは名前に神という文字を使うのはちょっとばか

し気が引けるからだ。

「俺の名前は塵、異界　塵だ」

「それじゃあ異界　塵。　またあえる日まで。」
そういうと永琳は去っていった。妖怪に襲われてここに来たのに一人で大丈夫なのだろうか？
まあそんなことを気にしても何も始まらない。今日はもう寝よう・・・

・

さてさてどうなるのか楽しくなってきた。人間が勝つのか？妖怪が勝つのか？それとも引き分けになるのか？
どうしてそんなに気楽でいられるかって？そりゃ人生楽しまなきゃソンってやつよ。

第参話　～人と妖怪と戦いと～

ｓｉｄｅ　塵

さて今俺はどこにいると思う？いつもの洞穴？森？都市？草原？
残念全部ハズレだ。俺は今以上から遥か離れた空中にいる。
なぜそんな所にいるかって？それは――――

時は数時間前に戻る。人間たちはいつもより騒がしかった。
月派と地球派はついには対立していた。
そして今日月派は月に向けてロケットを飛び立った。そして地球派は全武力を持って妖怪に戦争を仕掛けてきたのだ。
俺は洞穴にいたがどうも騒がしいので高見の見物ができるところを探した。

そしてここにきたわけだ。そして現在の戦況は人間が圧倒的有利。
いくら妖怪が強かろうと未知の科学力には勝てないようだ。
どんどん妖怪の数が減っていく。確かに人間の科学力はすごい。それでも妖怪たるものがこんなにも簡単にやられるはずがない。
でも少しずつ、確実に殺されていく。それはなぜか？

妖怪は元々人間に恐怖を与えるもであり恐怖の象徴そのものだ。人間に恐怖を与えることで力と姿を保つ。
しかし今の人間は科学の力で妖怪を殺そうとしている。そう、恐れも知らずに。
人間から恐れられない妖怪はどうなるか？当然力が衰える。故に今の状況では簡単にやられてしまうのだ。

ならどうすればいいか？それは簡単なこと。やつらに恐怖を思い出させてやればいい。絶望を見せ付けてやればいい。死の音を聞かせ

てやればいい。
ただそれだけ。そうたったそれだけなのだ。
そして俺は中立という立場を続行する。標的は人間、そして妖怪。
とりあえずは優勢で調子に乗ってる人間共だ。
俺は戦場の中央に立つ。そして炎を放ちあたり一帯を焼け野原にする。

「恐怖におののき絶望しろ！その絶望は死を与える！」
人妖共々焼いていく。元素を操り酸素を作る。何時までもこの地獄の火炎が燃えるように。

その炎が燃え尽きるころ人間の都市の方角から戦闘機が飛んできて何かを落としていった。おそらく核かなんかだろう。しかし今なら核の炎に包まれても大丈夫な気がした。
その数と大きさ、量からして都市には被害がないように調節されているのだろう。そんなことを考えていると核が爆発した。その爆発に巻き込まれる。が俺は死んでいない。
それどころかぴんぴんしている上に力がみなぎってくる。そのとき理解した。もうひとつの能力を。その名は

「ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」

そうそれはすべてに対応する能力。たとえそれが自然の摂理だろうと、神の力だろうと――――
そしてそれを自分のものにし、自由に操るという能力。

たとえば毒。その毒を無効化にし毒を自由に操る。

たとえば老化。老化という概念をなくし老いを自由に操る。

たとえば空腹。生物がエネルギーを必要とするという常識を消し空腹を操る。

そして核。その威力と炎を吸収しその力を操る。

これでわかった。なぜこの世界に来てすぐに風を操ることができたのか、なぜ妖怪の肉を食べて妖怪化したのか、なぜ何年たっても成長しないのか。
すべてはこの能力の力である。

当然人間たちは核の力を受けても元気そうにしている俺を見て焦る。

焦りは驚きを生む。

驚きは動揺を生み、

動揺は恐怖を作る。

恐怖をした人間は狂気に満ちる。

狂気に満ちた人間は冷静な判断ができなくなる。

戦場で冷静な判断ができない物を待ち受けるは――――死のみ。

ふん、馬鹿なやつ等だ。これでもまだ突っ込んでくる。レーザー砲やミサイルなど使いながら。面倒だ、一気につぶす。

大体人間がいる中央に立つ。そして核の力を溜め――――

俺が気がついたときは俺を除いて人間も妖怪もいなかった。

場所は変わり、ここはいつもの洞穴。俺はあるものの準備をしていた。
封印の儀式。そう邪悪なものなどを封印するときになどに用いる儀式である。
俺は俺自身を封印しようと思う。理由は聞かないでくれ。神が再び人間を創造するまですこし時間がかかるだろう。

そして創造された人間が好奇心でパンドラの箱を開けるように、触れるなと言われたものを触ってしまうように、
言い伝えられた絶対に解いてはならぬ俺の封印を解くものが現れるだろう。
そんなことを考えてるうちに術式が完成した。長い長い休息になりそうだが、自分が選んだ道。後悔はしてない。
それではまた数百年　いや数千年になるかな。またあおう。

side out

○

ｓｉｄｅ　とある村人

俺はただの農民。毎日水をやり雑草を抜き汗水たらしながら仕事をするただの農民だ。
だが俺はこの生活に嫌気が差していた。何度も同じ毎日を繰り返し、それでいて楽しいわけでもない。
俺の体が、脳が、神経が新しい刺激を求めている。そんな俺はあることを耳にした。

この村の西の山にはたいそう強力な妖怪が封印されているという伝説の話。普段はまったく伝説やらは信じないのだが、
その話を聴いた瞬間俺の体に何かが駆け巡った。これだ！俺の日常を変える出来事はこれしかない！

その日から暇があれば封印を解く方法や封印された妖怪の情報をかき集めた。
そしてついに封印されている場所も、封印を解く方法も見つけた。
そして伝説が本当だと言うことも確認した。
そして今日、ついに封印を解く。解き方を言うとまねする人が居るかも知れないので割合させてもらう。

青年封印解除中・・・・・・・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　異界　塵

この感覚。いつ振りだろうか。体に血が巡るこの感覚。数百年間の間、
生きているわけでもなく、死んでいるわけでもなく、
とても短かったような、それで居てとても長かったような、不思議な感覚だった。
まあ自分で選んだ時の過ごし方だからな。別に後悔も反省もしていない。ちなみにMではない。どちらかって言うとSだ。
そんな余韻に浸っていると。

「あなたは・・・・妖怪・・・・ですか？」
俺の封印を解いた青年がおびえながらそう言う。

「そうだが何か？」

「この山に強力な妖怪が封印されているときいたもので・・・・」
あ、わかったぞ。こいつ強力な妖怪が封印されている伝説と聞いて一緒に金銀財宝があるんじゃないかとか勘違いしてるんじゃないか？
よーし、そんな悪い子にはお仕置きが必要だな。

「言っておくが、金銀財宝神器レア者などはここには無いぞ？」

「えっ？」と普通の人間なら聞き取れないほど小さな声で青年が呟く。

「それに俺は腹が減った。だから　オレサマ　オマエ　マルカジリ」
青年はその言葉を聴いた瞬間小刻みに震え、大量の汗をかき、腰が抜け座り込んでしまった。
きっと自分は大変なものを復活させてしまったのではないかと考えているのだろう。

「なんてな。俺は封印を解いてくれた人間にそんなことはしねぇよ」
青年が「え？」と言いたげな顔をする。

「おまえ宝がほしかったんだろ？これやるよ」
俺は炭素を生成し集め、くっつけて形にしていく。金剛石ことダイヤモンドを作った。

「それは？」青年が尋ねる。

「これはダイヤモンドと言って多分この世界で一番硬い物質だ。」

「あ、ありがとうございます！」

「まあ俺は行くとするから、元気に暮らせよ」
俺はそういいながら空へと舞い上がり、能力を使い消え去るように飛んだ。

ふふふ。ついに復活だぜ。内心ずっと封印されたままだったらどうしようとか思ってた。まあ自分でやったのだから文句は言えないが。

さてこれからどうするか・・・・ 時期は多分諏訪大戦の少し前だろう。明日から情報を集めるか

第参話　～人と妖怪と戦いと～（後書き）

今日の更新はここまでです。
次は何時になるかな・・・

アドバイス・言いたいことなどがございましたらぜひ感想のほうをよろしくお願いいたします。

第?話　～洩矢の神～（前書き）

どうも、おはようございます、こんにちは、こんばんは。作者の箪笥です。
ここで少し報告しておきたいことがあります。
一つ目は第一話を伏線を立てるためのほんの少し文を変えました（といってもほとんど変わっていないが）
2つ目は永琳の名前のことなのですが、人間では発音できない名前なので、
塵は東方でのゲームの名前を使っています
永琳は相手が発音できないのを知ってるので偽名を使っている。
という設定で脳内補完をお願いします。
また注意書きにも書いてあるように俺設定が多く含まれているので注意していただけると幸いです。
長々とすいませんでした。それでは第?話始まります。

第?話　～洩矢の神～

side　塵

さて今日から諏訪大戦の情報を集めよう・・・・・・と思ったのだが、封印を解かれたばかりの妖怪が神の情報をかぎまわっている。なんて噂が流れたら警戒されてしまうだろう。そうなるといろいろ面倒になる。

なので俺の能力のうちの風を使って情報を集めることにした。諏訪大戦に関係しそうな話だけを風に乗せて俺のところに運ぶ。俺は寝ているだけでも情報を集められるのだ。通称「風の情報ネットワーク」だ。プライバシーのしんがい？なにそれおいしいの？ただ待つのも暇なので修行しながら待つことにしよう。体がどれだけなまっていることやら・・・・

○

あれから一週間がたった。この一週間でわかったことがいくつかある。

まず自分の身体能力、衰えるどころか格段にあがっている。妖力や霊力が封印前のうん十倍ほどありそうだ。封印されていた間も力は増えていたようだ

そしてもう一つは諏訪大戦はまだ始まっては居ないがお互いは戦いが始まることを知っていてピリピリしているようだ。
となるとどちらの神社に行くかが肝心だ。行ったところでどちらからも歓迎はされないだろうが。

まあ行くとしたら「洩矢　諏訪子」の方だな。たしか諏訪対戦は諏訪大社でおきたと思ったからそっちに行ったほうが移動がなくて楽だしね。
思い立ったらすぐ行動、というわけで行きますか。ここからそう遠くないみたいだからね

と、まあつきました。一瞬で。いや～便利だね風ってのは
情報収集にも使えるし移動、攻撃にも使えるからね。
まあついたって言っても神社の近くの森なんだけどね、そりゃいきなり人が神社のど真ん中に現れたなんてのは怪しいでしょ？俺だったら疑うね

霊力と妖力を隠し参拝客にまぎれて参拝していると痛みにも似た感覚が飛んできた。はい祟られてます。
俺の寿命が祟りでマッハなんてことはないが嫌な感覚だね。まあ適応するから関係ないけど。
一通り見るところ見て、参拝したあと、人が居なくなるのを鳥居の下で待つことにした。当然祟りが飛んでくるけど関係ない。

1時間ぐらいたってやっと人が居なくなった。それでも出てこない諏訪子に呼びかけてみた。

「そろそろ祟るのやめてくれないか？」
すると諏訪子が姿を現した。
「妖怪がここに何のよう？」
「ただの参拝だが？」
「だったらなんでずっとここで待っていたの？祟られながら」
痛いところをついてくるな・・・
「わかったよ。もう少しで神と神の戦いがあるんだろ？それを見に来た」
「どうして？」
「神の本気の力が見てみたくてね」
「変な妖怪だね。私の名前は洩矢　諏訪子、あんたの名前は？」
「俺の名前は異界　塵だ」
「異界　塵・・・！あんたさっき神の本気を見てみたいって言ったよね？」
「ん？ああ言ったが？」
なんだ？嫌な予感がする
「なら見せてあげるよ。神の本気！」
そういうと諏訪子が両手に力を集めて鉄の輪を投げてきた。まずい

この距離では回避できない

「くっ！」

「よし！」

「おいおい、不意打ちはないんじゃないか？」

「神力を込めた鉄の輪を手で捕った！？」

「生憎だが俺はお前が思っている以上に強いらしい」

「でもどうやって！」

「込められている神力は俺の妖力で相殺した。そうすれば飛んでくるのはただの鉄の塊。捕ることはたやすい」

「くっ、でもまだまだ！行くよ！」

諏訪子はそういうと少し離れてこれでもかと言わんばかりに鉄の輪を投げてきた

「まだ甘い・・・甘いぞ！」

鉄の元素を操り、鉄の輪を分解していく。

するとミシャグジ様が俺を祟ってきた。さっき諏訪子に祟られたとき適応したから問題ない。

が、やはり祟られるのはうっとおしい

「横槍をっ、入れるなぁ！」

ミシャグジ様たちを祟りを込めて睨む。するとミシャグジ様たちは

気絶した

「なっ！」

諏訪子が驚く。まあ自分の神力を込めた鉄の輪は消されるし、ミシャグジ様を睨んだだけで気絶させたら驚くだろう。実際は能力を使ったが。

また鉄の輪を消すときに込められている神力に適応したらしく神力を使えるようになった。

「今度はこちらから行くぞ！」

風を操り透明の弾丸を大量に作る。その弾丸を圧縮し鋭く、小さくしていく。そして一気に放つ。

諏訪子はそれを回避するが少しずつ、確実に被弾していく。結果的に大きなダメージを与えられた。

「さて、そろそろ決着をつけるか・・・」

右手にさっき適応して使えるようになった神力を右手に集める。それを見た諏訪子も力を溜めるがいかんせん行動にするのが遅かった。

「遅い！」

俺はためた神力を放つ。

「きゃあああああああああああ」

轟音と悲鳴が響き渡った

side out

ｓｉｄｅ　諏訪子

私は参拝客の中に妖怪が混じっていることを感じた。とりあえず追い払う程度に祟ってみたのだが、まったく動じる気がない。
その妖怪は参拝し、神社を見て回った。もしかしたらこちらに戦争を仕掛けてこようとしている神の手下かもしれないので警戒しておくに越したことはないだろう。
そして人が誰も居なくなったころその妖怪が口を開いた。

「そろそろ祟るのをやめてくれないか？」
仕方ないので姿を現しながら妖怪に質問する

「妖怪がここに何のよう？」

「ただの参拝だが？」
嘘。そんなはずはない。ただの参拝だったら人が居なくなるまで祟られながら待っているはずがない。

「だったらなんでずっとここで待っていたの？祟られながら」
妖怪は少し考えてからこう言った

「わかったよ。もう少しで神と神の戦いがあるんだろ？それを見に来た」
私はその理由が気になった。もしあちらの神の手下なら戦いの最中に乱入してくるかもしれない。

「どうして？」

「神の本気の力を見てみたくてね」
変わった妖怪だ。普通の妖怪だったら人間を助ける神の戦いなど見

向きもしないはずなのだ。

「変な妖怪だね。私の名前は洩矢　諏訪子、あんたの名前は？」
危険で有名な妖怪なら名前でわかるので自己紹介をして名前を聞き出そうと試みた。

「俺の名前は異界　塵だ」
私はその名前を聞いて驚いてしまった。私も噂でしか聞いたことはないが、過去に大きな事件を起こして封印されたと言う妖怪だ。
そんな妖怪をほおっては置けない。誰が封印を解除したかは知らないがもう一度彼には眠ってもらうしかない。

「異界　塵・・・！あんたさっき神の本気を見たいって言ってたよね？」

「ん？ああ言ったが？」

「なら見せてあげるよ。神の本気！」
私は両手に神力を集め鉄の輪を投げた。いま最先端の鉄武器だ。

「くっ！」

「よし！」
これで倒せなくとも大きなダメージを与えられたはず・・・だったのだが

「おいおい、不意打ちはないんじゃないか？」
彼は何もなかったように立っており、その手には鉄の輪が握られていた。

「神力を込めた鉄の輪を手で捕った！？」

「生憎だが俺はお前が思っている以上に強いらしい」

「でもどうやって！」

馬鹿な、同じ神力を使える神ならともかく妖怪風情がこんな芸当できるはずもない

「込められている神力は俺の妖力で相殺した。そうすれば飛んでくるのはただの鉄の塊。捕ることはたやすい」

そんなことを成し遂げるとは・・・やはりただの妖怪ではないと言うことか。

「くっ、でもまだまだ！行くよ！」

私は鉄の輪を大量に投げる。もちろん神力を込めて。

「まだ甘い・・・甘いぞ！」

彼がそういいながら手をかざすと鉄の輪は次々に消えてしまった。

しかしそのときわずかな隙ができた。

その隙にミシャグジたちに彼を祟るように合図をした。

「横槍をっ、入れるなぁ！」

彼がミシャグジたちをにらめつけただけでミシャグジたちは気絶してしまった。

「なっ！」

こんなことができる妖怪が居るなんて！神力も、ミシャグジも鉄の輪もまったく効かないなんて思いもしなかった。

「今度はこちらから行くぞ！」

そういうと彼の周りに風が集まっていくのがわかった。するとその風が弾丸になりこちらに飛んできたのだ。
私は避けようするが飛んでくるのは透明な弾丸。すべてはよけることはできず大きなダメージを負ってしまった。

「さて、そろそろ決着をつけるか・・・」
そういうと彼の右手に神力がたまっていくのがわかった。私もとっさにためるが遅かったようだ。

「遅い！」
彼の右手から力が放出される。

「きゃあああああああああああ」
その悲鳴とともに私は意識を手放した。

第?話　～洩矢の神～（後書き）

第?話どうだったでしょうか?

感想・アドバイス・意見・注意点などありましたら送っていただけると幸いです。

ちなみにこの小説は一話２５００文字から３５００文字の間になるようめざしています。

お知らせ（前書き）

お知らせとお詫び

お知らせ

箪「どうも作者の箪笥です。今回はお知らせがありまして書かせていただいています」

塵「どうした？こんな急に改まって」

箪「皆様もわかっていただけてると思いますが最後に投稿できたのは２０１０年９月１日です」

塵「そうだな。そう思うんだったら次話投稿したらどうなんだ？」

箪「僕もどんどん投稿していきたいのですが今、学校がとても忙しい状況になっております」

塵「つまり忙しくて投稿できないと？」

箪「夏休み明けテスト、部活の大会など忙しさが異常です」

塵「だから報告したいと？」

箪「なので今後も投稿は難しいかもしれません」

塵「学校の用事なら仕方ないか」

箪「なのでそちらが落ち着きましたら連載をしていきたいと思います」

塵「何時ごろに終わるんだ？」

箪「たぶん9月23日ぐらい」

塵「mjd」

箪「なのでこの場を持ってこの小説を楽しみにしてくださっている方々に深くお詫びを申し上げます」

塵「・・・いるのか？楽しみにしてくれている読者なんて」

箪「・・・いる、と信じたい」

塵「居るといいな・・・」

箪「そうそう、この忙しい中気分転換に書いた次話をこの後すぐに投稿したいと思います」

塵「そうか」

箪・塵「誠に申し訳ございません」

第語話　～神ＶＳ神と妖怪～（前書き）

前のページにも書いたとおり忙しい中書いたためクオリティが・・・
ｏｒｚ
まあ元から僕の小説はクオリティが低いんですけどね

第語話　～神ＶＳ神と妖怪～

ｓｉｄｅ　諏訪子

「ん・・・ここは神社の中？」

確か私はあの妖怪と戦って・・・そっか、負けちゃったんだ・・・

結局あいつの目的は何だったのだろうか？例の神の手下なら私が気絶しているときに私を殺したはずだ。

「お、起きたか。」

「これはあんたが？」

「いや、俺じゃない。感謝するなら東風谷（こちや）の巫女に感謝するんだな」

「そっか、あの子が・・・」

東風谷の巫女はうちの神社の巫女である。

「ねえ塵・・・あんたの目的は？」

彼が溜息をついてからこう答えた。

「だから神の力が見たい。それだけだ」

本当に不思議なやつだ。

「なんで神の力を見たがるの？」

「なんで・・・ねぇ・・・何でだろうな」

「答えになってないじゃん」

と私が笑う

「それはさておきここからは交渉なのだが俺を少しのあいだ泊めてくれないか？」

「・・・しかたないね、いいよ」

結局あいつのことは何もわかっていない。何をして封印されたのか？なぜ神の力を見たがるのか？

それを見定めるチャンスかもしれない。

「そうか。ありがたい。それと東風谷の巫女のところに行ってやれ。すごく心配してたぞ？」

「わかった。いってくるね。それと」

「それと？」

「短い間だけどよろしくね」

「ああ。よろしく」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　塵

俺がここに泊めてもらってから数日がたった。今日は何時にもまして諏訪子がピリピリしている。

そう、大和の神が攻めてくるのは今日なのだ。ソースは俺の能力。

そしてちょうど太陽が一番高いところに昇ったころそのときはやってきた。

「諏訪の神、出て来い」
「あんたね。ここの信仰を奪おうとしてる神ってのは！」
「私の名前は八坂　神奈子。大和の神だ」
「私は洩矢　諏訪子。いくよ！」
「ちょっと待った。あそこに居るやつは誰だ？」
と指を俺の方に刺して尋ねてきた。
「俺か？俺はただの見学者だ。手出しはしないから気にせず戦ってくれ」
神奈子は少し不満そうな顔をしたがそのまま戦いを始めた。

戦いが始まった。まず諏訪子がミシャグジ様に指令を出す。しかし、
「何の対策もしないでくると思ったか！」
ミシャグジ様の動きが止まる。神奈子の背負っている注連縄（しめなわ）からミシャグジ様の嫌いな力を出しているようだ。
「くっ！だったら！」
諏訪子が鉄の輪を次々に投げる。それを神奈子が回避していく。
「次は私からいくぞ！」
すると神奈子がいつの間にかに持っていたオンバシラを投げつける。
諏訪子がよける。しかしよけた先の地面からオンバシラが突き出し

てくる。それもかすりながらよけていく。

それから数時間が経った。
二人、いや正確には二柱かな？の戦いはまだ続いている。互いにもうぼろぼろなはず。
なのになぜここまで戦えるか？それは至極単純にお互いの気持ちのぶつかり合いなのだ。

諏訪子は自分の信仰を守るために

神奈子は自分の勢力を拡大するために

そう、単純だからこそそこから出る力は大きい。

しかし、その力を持ってもボロが出てしまうものである。
そう、まさにその瞬間諏訪子は神奈子のオンバシラに吹き飛ばされてしまったのだ。

○

「また負けたー！」
と悔しがる諏訪子

「神奈子、何故ここの信仰を奪った？」

「私への信仰を拡大するため。それ以外に何か必要か？」

「そうか。なら一つ忠告しておく、ここの信仰がお前に向くことはないだろう。仮に向いたとしてもそれは表面上だけだと思え」

「人間は強い神につくものだ。妖怪よ、なぜそう思う？」

「一つ、ここの諏訪子への信仰はとても根強い。それを変えようというのは難しい。２つ、神なら人の信じる心を侮らないこと。それが理由だ」
信仰すれば助けてもらえ、はむかえば祟られる。それははむかうなどという考えがまったく生まれる必要のないといっても過言ではないだろう。

「・・・もしお前が元々諏訪の神を信仰していた人間ならどちらにつく？」
神奈子が少し考えてからそういった。

「お前には悪いが諏訪子側だろうな」
意外な質問だが俺は即答する。

「そうか・・・ならお前にはここを出て行ってもらう」

「なら俺はそれを全力で抵抗させてもらう」

「なら武力行使させてもらう。長い間戦った後だがまだ十分戦えるぞ！」

「なら表に出ろ」

○

俺と神奈子は向かい合っている。

「いつでもどうぞ」

「ずいぶんと余裕だねぇ・・・行くよ！」

神奈子が諏訪子と戦ったときのようにオンバシラを投げてくる。

「風よ！」

俺は手をかざし風を操る。そして飛んでくるオンバシラにあてる。

するとオンバシラへの力の向きが変わり、そのまま神奈子のほうに飛んでいった。

「なっ！」

神奈子は驚きながらもそれを避ける。

「どうした？そんなもんか？お前の実力は」

「くっ！まだまだ！」

オンバシラを沢山投げてくる。さらに神奈子自身も突撃してくる。

「お前には悪いがさっさと終わらせてもらう」

オンバシラを回避しながら右手に神力をためていく。

「神力！？だったら！」

神力をためるのを見た神奈子は自分も神力をためる。俺とパワー比べか面白い。

「「行くぞ！」」

互いの神力がぶつかり合う。だが残念だったな。お前ら神は信仰を神力とするが俺は適応してえた能力として神力を使っている。

つまり神奈子の神力は有限。俺の神力は無限ということだ。

そして有限であるということはいずれガス欠を起こすこと。

有限と無限の力がぶつかり合ったら最終的にどうなるかわかるだろう。

俺の神力が神奈子の神力を飲み込んでいく。そしてそのまま神奈子を飲み込んでいった。

「お、あれを食らって立ってられるか」

「悔しいけど私の負けだ」

「そうか、じゃあ」

「追い出すことはあきらめる」

「いや、俺は出て行く」

「「なぜ！？」」

「俺は俺の目的を果たしたしお前らと戦うこともできた。だから出て行く。妖怪が神社にいるなんて邪魔くさくてしかたがないだろ？」

「じゃあなぜ私と戦った？」

「諏訪子に聞いてみな。少しはわかるかもしれないな。それとお前らせっかく同じ勢力になったんだからなくよくしろよ」

「もう行くの？」

「ああ、まあお前らとならもう一度会えるだろう。それじゃあ、また会える日まで・・・」

いつもどおり風を使って移動する。どこにいこうかねぇ・・・

第語話　～神ＶＳ神と妖怪～（後書き）

感想、訂正などありましたらどしどしお願いします

第ｓｉｘ話　～暇つぶしは歩いてやってくる～（前書き）

どうも、久しぶりです。箪笥です学校からの呪縛から少し開放されたので、投稿したいと思います。
相変わらずクオリティは（ｒｙですがよろしくお願いします。

第ｓｉｘ話　～暇つぶしは歩いてやってくる～

ｓｉｄｅ　塵

俺はとある森の中に居た。今後の予定を立てているところだ。
次、東方の原作キャラに合えるとしたらおそらくかぐや姫こと「蓬莱山　輝夜」だろう。
となるとそれまでの長い時間をすごさなければいけない。どうしたものか・・・

・・・ん？

ふふふ、どうやら幸運というものは歩いてくるものらしい。
なに？何を言ってるか意味がわからない？そりゃあそうだ。おれ自身にも「目」では見ていないのだから。

「大妖怪様が俺に何のようだ？」
俺は何もない空間にしゃべりかける。はたから見たらただの変な人に見えただろう

「・・・」
当然言葉は返ってこない。いや、隠れて黙視しているといったほうが正しいか。

「・・・出てこないなら引きずり出すぞ」
今度は少し強めにしゃべりかける。

「はぁ・・・あなたにはかないませんわね」
すると空間にスキマができて中から人、いや妖怪が出てきた。

「俺に何のようだ」

「まあそんなに堅くならずに自己紹介と行きましょう？私の名前は八雲　紫よ」

「お前はもう知ってるだろうが俺の名前は異界　塵だ。よく知らんが有名らしいなこの名前。少し前に神に名乗っただけで攻撃された」俺は少し笑いながらあのときのことを思い出す

「それで俺に何の用だ？」

これで三回目だ。

「あなたに手伝ってほしいことがあるの」

てつだってほしいことねぇ・・・まあ幻想郷関係のことだろう。

そのとき体が何かを感じた。何かがないものを探すような動きだ。

「・・・言っておくが俺には食欲というものはないぞ？」

さしずめ紫が食欲あたりの境界を弄ろうとしたのだろう。

「驚きね。私の能力が効かないなんて」

ほらやっぱり。

「それで何を手伝ってほしいのだ？」」

できるだけめんどくさいのはごめんだ

「あら、怒ってないの？」

「こんなことで怒ってたら体が持たん。それともなんだ、落とし前

をつけてくれるのか？」
少し妖力を開放し笑って聞く。ただし目でにらみながらだが

「・・・遠慮しておくわ」
紫は少し間を置いてからそう答えた。なんだ遠慮しなくてもよかったのに。

「手伝ってほしいことというのは、私の夢の実現なの」

「・・・具体的には？」
おおまかのことはわかるのだが何をするのかがよくわからないとちゃんとした返事ができない

「私の夢は人間と妖怪が共存する場所を作ることなの」

「それで？」

「それにはまず土地が必要なの」

「だからどっかの広い土地をもらうか奪って来いと？」
だとしたらとても面倒なのだが・・・

「いえ、場所の目星をついているのだけれどね・・・」
なるほどそういうことか。

「場所は？」

「周りからは妖怪の山といわれている山とその周辺よ」
なん・・・だと・・・妖怪の山か。この世界に来たとき以来行ってないな。

「わかった。いいだろう」
久々に妖怪の山に行きたくなったので快く引き受けた。鬼の皆様にも会えるだろうしね。

「あら、そんなに簡単に引き受けていいの？」

「ぱっとみ悪そうなやつじゃないし、丁度あそこに用事があるからな」

「用事？何かしら？」

「里帰りってやつか？俺が生まれたところに行こうとおもってな」
まあ正確にはこの世界に来た場所だがな。

「まあ善は急げ。行きましょうか」
あれ、もう行くの？別にいいんだけど早すぎる気が・・・まあいいか

「そうだな」

こうして俺は故郷（？）に行くことになった。
これから起こる激闘のことなども知らずに――――

side out

side 紫

私は悩んでいた。自分の夢、妖怪と人間が共存できる理想郷を作ること。
しかもそれには大きな土地が必要だ。それも普通じゃないほどの大きさの土地が。
しかしその土地を確保するのは私には困難だ。だから私は助っ人を探すことにした。
そしてその男は今私の目の前に居る。そんなことを考えていると。

「大妖怪様が俺に何のようだ？」
彼が話しかけてきたのだ。おかしい。妖力は完全に隠している。そもそもスキマに隠れている私を見つけるなんて不可能なのだ。
彼の様子を見るためにそのまま黙視することにした。私が隠れていることがばれていないことに賭けて。

「・・・出てこないなら引きずり出すぞ」
やはり見つかっていたらしい。ここはおとなしく出て行くのが得策か。

「はぁ・・・あなたにはかないませんわね」

「俺に何のようだ」

「まあそんなに堅くならずに自己紹介と行きましょう？私の名前は八雲　紫よ」

「お前はもう知ってるだろうが俺の名前は異界　塵だ。よく知らんが有名らしいなこの名前。少し前に神に名乗っただけで攻撃された」
神に攻撃されたことを笑って話すなんて規格外ね・・・

「それで俺に何の用だ？」

「あなたに手伝ってほしいことがあるの」
すぐに話すのもいいのだが頼みが頼みなので実力を図っておく必要がある。
なので少しためさせてもらうことにした。
「・・・言っておくが俺には食欲というものはないぞ？」
「驚きね。私の能力が効かないなんて」
まったく効かなかった。これなら任せても大丈夫だろうか。
「それで何を手伝ってほしいのだ？」
「あら、怒ってないの？」
意外と友好的なようだ。
「こんなことで怒ってたら体が持たん。それともなんだ、落とし前をつけてくれるのか？」
と彼が笑う。しかし目が笑っていない。
「・・・遠慮しておくわ」
「手伝ってほしいことというのは、私の夢の実現なの」
決めた。彼に助っ人を頼むことにした。
「・・・具体的には？」
「私の夢は人間と妖怪が共存する場所を作ることなの」
「それで？」

「それにはまず土地が必要なの」
そう。大きな土地が必要なのだ
「だからどっかの広い土地をもらうか奪って来いと？」
「いえ、場所の目星をついているのだけれどね・・・」
「場所は？」
「周りからは妖怪の山といわれている山とその周辺よ」
「わかった。いいだろう」
彼はあっさり引き受けてくれた
「あら、そんなに簡単に引き受けていいの？」
「ぱっとみ悪そうなやつじゃないし、丁度あそこに用事があるからな」
「用事？何かしら？」
あんな鬼や天狗が大量に居るところに何のようがあるのだろうか？
少し気になったので聞いてみた。
「里帰りってやつか？俺が生まれたところに行こうとおもってな」
意外な返事が返ってきた。
「ふーん・・・まあ善は急げ。行きましょうか」
「そうだな」

そんなこんなで私たちは山に向かった。新たな伝説が生まれることも知らず――

side out

To Be Continued....

第ｓｉｘ話　～暇つぶしは歩いてやってくる～（後書き）

言いたいこと、感想、誤字脱字などありましたら書き込みお願いします。

第?話　～妖怪の山ｉｎ麓～中腹～（前書き）

どうも箪笥です。あれこんなときに誰か来た。

「よう、筆者の箪笥」

げっ・・・塵

「げっじゃねぇよ！お前が作ったキャラだろ?！」

それ自分で言ってて悲しくならない？

「・・・そんなことはどうでもいい！どういうことだよ。復帰したんじゃ無いのか？なのに最終登校日が９月２４日っておかしいだろおい」

コレにはふかーーいわけがあるんだ！

「じゃあ言ってみろ。返答しだいでは・・・」

わかった！言うから！にらむのをやめれ。理由というのはだな・・・夏休みあけた直後に忙しすぎて休止するって言ったよな？

「言ったな」

それが終わって一安心・・・と思ったらだな・・・次の週に部活の大会で練習厳しくモチベがあがらず書けなかったんだ！しかも終わったと思ったら中間テストのお知らせが届きました。

「なん・・・だと!?」

つまりまとめると

忙しくて休止→再開→大会でモチベｏｒｚ→中間テスト／（＾ｏ＾）／

→今ここ

というわけだ・・・そして中間テストは今週の金曜日!その次の日は大会。

さらに来週の土曜日は学校行事が・・・学校は生徒殺すきか!

本当にすいません・・・

Ｐ．Ｓ　前置き長くてすいませんｏｒｚ

Ｐ．Ｓ２　台詞の後ろに名前があると台本読んでいるみたいという意見が寄せられたためなくしました。

第?話　～妖怪の山ｉｎ麓～中腹～

ｓｉｄｅ　塵

「・・・なあ紫よ。本当にこの山でいいのか？」

「ええ、ここよ　　たぶん」

「たぶんって何だよ。たぶんって！」

「知らないわよ！ここには何回か来たことあるけどこれだけ探し回って妖怪１匹見つからないなんて初めてよ！」

と、まあ紫と口喧嘩しています。理由？理由はだな・・・

○

「ほぉ・・・ここか。昔より大きくなってるな・・・」

「さっさと鬼の王に会って交渉しましょう？」

「あ、やっぱり鬼が支配してるのか。なら・・・」

「なら？」

「歩いて行って観光でもするかね。そのついでに鬼と戦って王がどこにいるか聞き出す」

「まあ・・・たまにはいいわね」

○

というわけなのである！因みに歩いてから3、４時間経っている。のだが誰にも遭遇できない。どうしたものか・・・

それからまた半刻ほど歩いた。すると少し広い広場のようなところに出た。

ん・・・殺気とか妖気とかを隠そうとしてるやつらがいっぱい居るが隠しきれて居ない。

鬼は不意打ちしたりとか卑怯なことを嫌うからこの気配は鬼ではない・・・とすると天狗か？

「ここに居るやつらがやっと相手をしてくれるそうだぞ？紫」

わざと相手に聞こえるように話す

「そうみたいね」

ふふふっと胡散臭い笑い方をする紫。
その言葉と同時に大量の天狗が出てきた。ひい、ふう、みい・・・
ええい！数えるのもめんどくさい！

「だが出てくるタイミングが悪かったな。なかなかお前らに会えなかったからいらいらしてるんだ」

「知らないわよ。私たちだって鬼の宴会の準備で大変だったのよ」
沢山居る天狗の中から一匹の天狗が出てきた。あれは・・・「射命丸　文」だ。

「・・・まあいい。ここを通らせてもらう。紫、危ないからスキマにでも隠れてろ」

「鴉天狗隊！行け！」
紫が隙間に隠れると同時に文が指令を出す。数で押せば勝てると思っているようだが甘いな。

「甘い！」
右手を地面に当て力をためる。そして・・・放つ！

ｓｉｄｅ　紫

私は驚くことしかできなかった。
彼が手を地面につけてしばらくした後信じられないことがおきたのだ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なんと広場一面に炎の海ができたのだ。それも森には燃え移らないように調節してあるのだ。

さらにその炎がとても大きく、すぐに反応して逃げようとした天狗も多く巻き込まれた。
天狗は動きがすばやいためそうそう攻撃に当たらないのだが・・・。

そして一番驚くべきは発動モーションこそあったものの、まったく妖力の類が見られなかった。
普通、能力を発動するときや妖怪独特の攻撃をするときは妖力などが見られるのだが、彼からはまったく妖力が見れなかったのだ。

どうやら彼は私が思っていたより規格外のようだ。鬼とはどう戦うのが楽しみね。

side out

side 文

私は油断していた。相手からは妖力がまったく見られなかったからだ。
その上相手は一人、こちらは数え切れないほど居る。数で圧倒できるはずだった。
しかし、そんなことはなかった。一瞬にして炎の海ができたのだ。

「！　まずい！引け！」
そんな私の掛け声も意味が無かった。天狗たちはあっという間に炎に飲まれてしまったのだ。

「くっ！生存確認！動ける者は負傷者を連れ撤退！」
やむをえない。ここは一時撤退することにする。はぁ・・・上司になんていわれるか・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　塵
「おーい紫もういいぞ」
すると空間が裂け、紫がスキマから出てきた。

「ほんと、あなたって規格外ね」

「仕方無いだろう。長生きなのに加え能力があれだから」

「そういえば貴方の能力を聞いていなかったわね・・・」
あれ？そうだっけ？すっかり忘れていた。

「俺の能力は『ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力』だ」
改めて思うが俺の能力の名前って長いな。だって２５文字だぜ？

「チートもいいところね・・。ってことは私の能力も使えるんでしょ？」
そういえば少し前に適応したな。

「使えるぞ？ほら」
スキマを開きながら言う。

「ありとあらゆるものってことは老いと死も無いのかしら？」
「老いは無いが死は自分の力を使って適応しないようにしている」
「あら、何故かしら？」
「さあね・・・気まぐれってやつだな」
本当の理由は人間である証を残しておきたかったからだ。一応自分は妖怪ってことで通しているので回りには伏せておく。
「ふうん・・・まあいいわ。いきましょ？」
「そうd「「ちょーーーと待ったーー！！」」な」
誰だよ。俺の台詞邪魔したやつ。ってあれは角か。一角に双角・・・
あ、某怪物狩のゲームのあいつ等じゃ無いからな？
片方は双角で○と△と□の分胴をつけた鬼。「伊吹　萃香」だ。
もう片方は一角で体操服に半透明のスカートの鬼。「星熊　勇儀」だ。
「で、鬼さんが俺たちに何のようだ？」
「とぼけるんじゃないよ！」
と勇儀
「山に勝手に入った上に天狗を攻撃したことを後悔させてやる！」
と萃香。いや、山にここまで進入させたお前らも悪いと思うぞ？
「で、どっちが戦うんだ？」
二人は当然といった顔で

「「私に決まってるでしょ！」」
あー、見事にハモった。予想通りっちゃあ予想通りだが。
「あー、どっちかにしてくれよ。二人同時に相手にするのは面倒だからな」
「よし！ならここはじゃんけんで決めよう」
と勇儀
「いいね！」
と萃香。あのー・・・ここでじゃんけんとか終わらないフラグじゃあ・・・まあいいか
「「じゃーんけんぽい！あいこでしょ！あいこでしょ！（ｒｙ」」

○数分後～

「「あいこでしょ！あいこでしょ！（ｒｙ」」
おいお前ら何時まで続けるつもりだよ。
「だーーー！お前らじゃんけん長すぎなんだよ！大体、両方グーしか出さないってどういうことだよ！」

「う・・・それもそうだね・・・」

「わかった。こっちから指名するぞ！それでいいな？」

「まあ・・・いいよ」

と勇儀

「もちろん私だよね！」

と萃（ｒｙ

「じゃあそっちの一角が俺と、双角が紫と。それでいいな？」

「ちょっと。私にも戦わせる気？」

「当然だろ。それに元々お前の用事だろ？」

まさか全部俺に任せるつもりだったのか？

「仕方ないわね。いいわよ。来なさい！

そんなこんなで鬼の萃香と勇儀と戦うことになった。さて・・・どうなることやら

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第?話　～妖怪の山ｉｎ麓～中腹～（後書き）

感想・意見などありましたらよろしくお願いします

※これは2次創作です。原作の設定と多少（というかかなり）あるかもしれません。そこらへんは大目に見てくれるとありがたいです

第ハチ話　～妖怪の山ｉｎ闘い～（前書き）

更新遅れてすいません・・・
忙しくてモチベがあがらずなかなか完成しなくて・・・
そしてまた更新は遅めになると思います
また３週間ほどあとに期末試験があるんです。
鬱だ・・・

※７話で塵が双角の鬼と戦うという台詞がありましたが「一角」の間違えでした。なので訂正させてもらいました。本当にすいませんｏｒｚ

第ハチ話　～妖怪の山ｉｎ闘い～

妖怪の山の中腹で戦いが始まろうとしている。

「いつでもかかって来い」

「じゃあ・・・遠慮せずに行かせてもらうよ！」
勇儀が殴りかかる。それを小さくかわす。それをしばらく続けていた。
勇儀の能力は怪力乱心を操る程度の能力だから力が計り知れない。

「どうしたんだい？ぜんぜん反撃しないじゃないか」
勇儀が攻撃を続けながらたずねてくる。

「ふん、だったら一発でも当ててみろ」
俺は挑発する。

「なかなか言ってくれるねぇ・・・だったらこれをよけてみな！」
少し下がってから力をためながら歩きだす。そして三歩目を出した瞬間――――

「三　歩　必　殺　！」
今までの攻撃より早く威力がある。よけれないと察知した俺は防御を固める。

ドガアアアアアアアン

山中に音が響いた。隣で戦っていた萃香と紫が戦いを中断させるほどの音

「な！馬鹿な！これを食らったら萃香でも気絶するんだよ！？」
勇儀が驚くのも無理は無い。絶対の自信を持っていた攻撃が防がれたのだ。
まあこちらも無傷な訳が無く左手が動かない。こりゃ折れたな。

「どうした？こちらから行くぞ」
無事な右腕を使って殴る。左手で攻撃していた分の隙は足で対処する。
それを勇儀がかわす。やはり一筋縄ではいかないな。

「悪いが能力を使わせてもらう。風よ！」
この風は攻撃でも妨害でもなく自分に使う。つまり風の力で攻撃の速さをあげるというものだ。

「早い！」
勇儀がよけようとするが遅い！。なんたってこの速さは片手で両手を使っているときと同じペースで攻撃できるのだ

「くっ！まだまだだよ！」
こっちがラッシュする中無理やり攻撃を入れてきた。それが見事にヒットするが、

「残念。残像だ」

残像が残る速さで背後に回りこみ思いっきり攻撃を決める。
「なっ！がはっ」
勇儀は吹っ飛び木に激突する。
「どうしたこんなものか？鬼の四天王の力は！」
「まだまだぁ！」
勇儀が立ち上がり突撃してくる。早い。が、とらえられる！
攻撃を受け流し流れに身を任せながら裏拳を入れる。
「うがっ！」
地面にたたきつける。
「はぁ・・・はぁ・・・まだだあああああ！」
さっきよりも早い。守りを固める。
大きな音が鳴り響く
ズサアアアアア
守りを固めたときの格好で数M飛ばされた。
ドサッ
その音とともに勇儀が倒れる。
「おっと、大丈夫か？」

近づいて肩をかし立ち上がらせる。
「ああ、すまない」
紫が戦っていたところにいくと紫と萃香が意気投合して話をしていた
○
「いや～私たちの完敗だよ」
と萃香
「ほんとだよ」
と勇儀
「それに・・・さっき折れた腕、もう治ってるんだろ？」
「よくわかったな」
わからないように行動してたつもりなんだが
「私みたいに数多く戦ってるとわかるもんさ」
まあそうだな。

「さて、鬼の王が居るところを探すか」

「そうね」

「・・・これは私たちの一人ごとだけど」

ん？

「母さんは今、山の８合目あたりに居たっけ」

ははん、なるほど教えてくれたのか。それに母さんってことは女か。

女の鬼の王って行ったら鬼子母神か。

「ありがとうな、勇儀、萃香」

これで探す手間が無くなった

「勘違いするんじゃないよ？一人ごとだからな」

そういうと勇儀と萃香は行ってしまった

「行きましょ？」

「だな」

○

ったくどうしてこうなるかな。さっきまで人っ子一人居無かったの

に急に出てきやがった

「なあ紫。飛んでかないか？」
妖怪を適当にあしらいながら言う

「貴方が歩いていくっていったんでしょ？」
胡散臭い笑いをしながらそう返してくる。因みに紫はスキマの中に居る

「・・・あんなこと言わなければよかった」
そんなことを行ってるうちに８合目付近まで着いた。
おお、居る居る。鬼の皆様が沢山居るよ。正直あそこに出るのは気が引ける

「さあ行くわよ？」

「あのね？紫さん？貴方はスキマにかくｒ「だれだっ！」鬼に見つかった・・・。しかもまた台詞さえぎられたし」

「誰だと聞いているんだ！」
答えてもいいけどどうしよう。なんてことを考えていると

「そいつ等は私の客人だ」
妖力がとても多く強そうなやつが出てきた。

「しかしですね・・・」

「私の客人だといっているのだ。さっさとほかのやつらを違う場所に移動させろ」

「・・・了解しました」
なんつー発言力。いやここのトップなんだろうけどさ。

おおー、早い早い。さすがトップ命令逆らえないようだ。

「・・・で、何のようだ？」

「おいおい、自分から手下を避難させといて何のようだ？は無いだろ」

「そう・・・かもなっ！」
ゴォという音と共にものすごいオーラがあふれ出す

「少しまずいかもな・・・紫！隠れてろ」

「ええ、気をつけて」

「一人で私にかなうとでも？」

「伝説の妖怪も・・・なめられたものだな」
自分で二つ名を言うのも変な感じだな・・・

「伝説の妖怪・・・フハハハ、面白い！ならばその伝説を打ち砕いてみせる！」
早速戦闘ですかそうですか。いやこうなるのはわかってたんだけどね？

さてどう戦うか・・・そもそもあいては能力を「あぶねっ！」考えてるところ攻撃してきやがった。

「どうした。闘いの中で考えすぎると死ぬぞ？」

「ええ、ご忠告どうも。行くぞ！」

相手の実力がわからないので様子を見ながら攻撃する。
「その程度か？本気を出してみろ」
殴り掛かった手をつかまれてそのまま後ろに投げられる。地面につく直前に風の力を働かせ受身を取り瞬時に立ち上がる
「お前こそ本気じゃないだろ？」
「さあな」
相手が一気に間合いをつめて攻撃してくる。それを手ではらう。すると足を刈って転ばせようとするのを少し跳ねてかわす。
「いいのか？空中では動きが制限されるぞ？」
先ほどはらった方の手を裏拳のようにして戻してきた。それが俺の体に当たる。が
「残像だっ！」
素早く背後に回りこむ。そして思いっきり打撃を打ち込む
「なっ！」
ドゴオオオオオオン
大きな音が当たり一面に響く
「フハハ。面白い。面白いぞ！なかなかの速さと打撃だ。しかしそんなもの私の能力の前では無力と化す！」
能力だと・・・あいつの言い方だと威力とか力の方向性とかに関係する能力か？
「どんな能力だろうと関係ないな」

風の力で一気に間合いをつめて攻撃する。つもりだったのだが

「てめぇ・・・何をした？」
突き出そうとした腕が動かなくなった

「なあに、能力を使っただけさ」

「さしずめ威力を操る程度の能力ってところか？」

「ちょっと違うな私の能力は『速度を操る程度の能力』だ。速度があるのもならばすべての速度を操れる」
速度を操る能力か・・・厄介だな

「厄介な能力だな。だが・・・相手が悪かったな！」
もう一度距離をつめる

「無駄だっ！」
相手が能力を使う。が、

「どうかな？」
そのまま攻撃を仕掛ける

「バカなっ！」

「俺の能力は『ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力』だ」

「・・・やはりお前は面白い！面白いぞ！」
すると相手の姿が消える。いや、能力を使い速度を上げて通常では決して捉えることのできない速さで動いているのだろう。その証拠

として小さな音がそこらじゅうから聞こえる

「ふむ・・・どうしたものか・・・」
警戒しつつ対策を考える。能力を使ってもいいがそれでは面白くない

「考えすぎると死ぬと忠告したはずだが？」
その声と共にいきなり前に現れ攻撃してくる。
それをあわててガードする。がすぐに背後から攻撃される。

「さすがだな・・・速度を操れても生半可な実力ではこんなことできまい」
その攻撃を紙一重でかわしながらそうつぶやく。
しかし、後ろからの攻撃をかわしても次は右から、その次は左とすごい勢いで移動と攻撃を繰り返してくる。
これでは反撃できない。避けるだけで精一杯だ。

「これだから闘いはやめられない！」

「・・・やっぱ鬼ってことか」

「お前の実力はこんなもんじゃあるまい！」
スピードをさらに上げ殴りかかってくる。
それを防御する。が、

「がっ！」
その刹那、背後からものすごい衝撃が襲う。その勢いのまま吹き飛ばされ木々をなぎ倒し数十メートルは吹き飛んだ。
早い。その一言に尽きる攻撃だった初段の攻撃が当たったときはもうすでに背後に居たのだ。
いそいで立とうと体制を立て直すと

「どうした？まだまだいけるだろう」

そこには鬼神が立っていた――――

to be continued

第ハチ話　～妖怪の山ｉｎ闘い～（後書き）

訂正したほうが良い点、感想、誤字脱字などがありましたら書き込んでくれると筆者のモチベーションが上がります

第?話　～決着と山の謎～（前書き）

前回よりは早くうｐ
が、クオリティの低さはいつも通り。さらにはほかの話に比べて短いと言うおまけ付です。それでもよろしければどぞー

※題名に?とありますがチルノはまったく関係ありません

第?話　～決着と山の謎～

「もう終わりか？」
鬼神が尋ねる

「まさかと思うが・・・これが本気とは言わないだろうな？」
俺が尋ねる

「本気なわけが無いだろう？」
鬼神が答える

「よかった。こんなのが本気だったらがっかりするところだった」

「この状況でよく言うわ！」

「それは・・・どうかな？リミッター解除レベル1・・・いくぞ」
自分のリミッターを一つ解除する。そして一気に立ち上がり間合いをつめる

「先ほどより数段レベルがあがった！？」
よけれないと判断した鬼神は急いで防御をする。

だが・・・脆い。防御は完璧の力でなくてはならない。あせって作ったものなど本来の防御に遠く及ばない。そこに漬け込む。

「無駄だ・・・」
拳がガードをつきぬけ相手が吹き飛ぶ

「がはっ！」

「どうした？まだこれるんだろ？」

「あたりまえだっ！」

相手が速度を操り先ほどと同じ攻撃をしてきた

右・・・左・・・前・・・右・・・後ろ・・・さまざまな方向から

攻撃される。

そしてさっきと同じように高速の２連打を放ってくる。が

「そう何度も同じ手にはかからん！」

相手が攻撃するよりも早く攻撃を仕掛ける。

「なっ！」

ドガァァァァァン

「チッ、タフなやつだ。」

その一撃を食らっても倒れない。

「私もそう簡単にやられるわけにもいかないんでな」

「このままでは埒が明かん。・・・お互い次の一撃で最後にしよう

じゃないか」

「・・・わかった。いいだろう」

お互いは少し離れ力をためる。そして

「行くぞ！うおおおおおおおおおお！」
俺が走り近づく
「はあああああああああああああ！」
相手も走る。
そして拳と拳がぶつかり合う！
ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン
その音は山全体に響いた。
その勢いで砂煙が一面に上がる。
その様子を見ていた紫は急いでスキマから飛び出た。
しばらくしてから砂煙が徐々に晴れ、２つの影ができる。それを見た紫は
「貴方はよくがんばったと思うわ・・・」

ドサッ。２つの影のうち一つが倒れる

「伝説の妖怪相手にここまで戦ったのですもの」

○

結果、最後のぶつかり合いは俺が勝った。そして俺が戦いに来た理由を知っている鬼神は俺たちの要求を受け入れた。
その要求は「この山とその周辺の土地の権利をもらうこと。ただし鬼たちはこの山に残ること」という内容だった。
この要求は紫が決めたものだ。
鬼を追い出さないのは幻想郷ができてからの妖怪と人間のバランスをとるためだろう

最初は鬼たちが頭の負けた者が管理する土地にとどまるなんて恥だ！なんて言っていたが
「いつもどおりこの山で暮らしてればそのうちいろいろなところか

ら強い妖怪や人間がくるんだぞ？」
と、吹き込んだところ、俄然態度を変えて残ると言い出した。
さすが鬼だな、まじぱねぇ。

「ありがとう。塵、助かったわ」
すべての契約を終えた後、紫がそう言ってきた

「気にするな。俺もここにようがあって来たのだからそのついでだ」

「そういえば気になっていたのだけど、その用って何かしら？」
これは教えていいことなのだろうか？一瞬そう考えたが紫のことだから何を言っても無駄だろう。

「おい、鬼神。居るんだろ？」

「居るぞ？」
そういうと木の陰から出てきた

「ここ最近・・・いや数百年単位で昔に洞窟が一つ、勝手にできただろう？」

「ああ、あれは今から３６万・・・いや１万４千年前だっｔぐほぉ！」
まじめに話さなかったので殴ってやった。というかそのネタどこで知った？

「まじめに話せ」

「少しふざけただけじゃないか」

「ほう・・・もう一発くらいたいか。そうかそうか」
こういうのは好きじゃないんだがこれも話させるため。力をためて脅す。

「ホウントウニスイマセンデシタチャントハナシマス。たしか洞窟ができたのは数千年前だ」

「で、その洞窟に入ったのは？」

「中を確認させるために送った天狗の小隊とその天狗を探しに言った部下の天狗たちだ」

「ということは両方戻ってきてないんだろ？」

「もうかなり昔のことだがな・・・戻ってきてないんだ」

やはりそうか・・・その洞窟は元居た世界。つまり未来からこちらの世界・・・過去と呼ぼうか。過去に来たときに使った洞窟だろう。では過去からこの洞窟に入ったらどうなるだろうか？未来→過去なら当然、過去→未来となるだろう。
しかもどの時代に飛ばされるかわからない。少なくとも未来ということは確定だが。

「まさかその洞窟に行くというんじゃないでしょうね？」
紫が睨みながら俺に言う

「・・・さあな。鬼神。とりあえずその洞窟まで連れて行け」
すると鬼神は紫を見ながら

「はいはい・・・どうせ断っても自分で探すんだろう？こっちだついて来い」

「待ちなさい・・・異界　塵。ここから先には通さないわ」

「何故？」

俺がわかりきったことを聞く。

「さっきまで仲間だった人がわざわざ死にに行くようなことを止めない理由があるかしら？」

「そうか・・・でもお前ならわかるだろう？お前じゃ俺を止めることはできない」

「そうかしら？やってみないとわからないわ。そんなこと」

「なら押し通るまで！」

「私は貴方を絶対に止める！行くわ！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第?話　～決着と山の謎～（後書き）

どうだったでしょうか?
先頭描写って難しい・・・
最後は上シリアスにしようとしたのですがどう見てもシリアスもどきです本当に（ｒｙ

感想、訂正したほうがいいところ、などありましたらよろしくお願いします。

え?テスト勉強はどうしたのか?　ヤメテッ!

第一０話　～弾幕、山に舞う～（前書き）

どうも、箪笥です
ヒャッハー！期末テスト終わったぜぇぇぇ！

というわけで更新しました。
又テストが終わったので更新ペースを早くできる・・・・！かも

それではどうぞ

第一０話　～弾幕、山に舞う～

スゥゥ　ヒュッ　ドドドドド

俺は今、紫と戦っている。それはなぜか？

俺は自分の目的の場所へ行くため。

紫はおれを危険な場所へ行かせないために。

俺の能力は「ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」で、
その名のとおり俺に干渉するありとあらゆるものに適応し能力の一部とすることができるというチート能力だ。
しかし、この能力には弱点がある。この能力が働くのは何かが俺に干渉したとき、逆に言えば俺自身に干渉しなければ発動しないのだ。
東方キャラの能力でたとえるなら永琳の「あらゆる薬を作る程度の能力」や諏訪子の「坤を創造する程度の能力」などの何かをつくる、又は自分の能力を上げるなどの能力には発動しないということだ。
紫の「境界を操る程度の能力」も、俺に関係する境界なら適応できるが、俺に関係しない境界を操ったときは適応できないのだ。

つまりどういうことかと言うと、俺が紫に殴りかかってもスキマをひらかれてしまえばそれでおしまいなのだ。

「どうしたものか・・・」
俺が考えている間にも紫は攻撃をしてくる。因みに紫は後に「弾幕」といわれるもので攻撃を仕掛けてきている。この時代でもうすでに弾幕ってあったんだね。

「どうしたの？もしかして鬼神との戦いで力を使い果たしたの？そんなんだったら私を倒すことなんてできないわ！」
言ってくれるじゃねぇか・・・決めた・・・その弾幕戦受けて立つ！

「はあぁ！」
元素を操り火、水、風の弾幕を作る。それを操り攻撃する。
しかし、その弾幕は紫の手によってつくられたスキマに吸い込まれていってしまう

「それだけじゃなくってこんなこともできるのよ？」
紫がそういうと俺の後ろでスキマが開き先ほど吸い込まれた弾幕が飛び出してくる。

「チッ、めんどくさい」
速度を上げそれをよける。

「なら・・・これならどうだ！」
さまざまなところに弾幕をつくる。それを一斉に紫にめがけて飛ばす。

「この程度の攻撃なんて」

紫は自分がつくったスキマに隠れ回避する。

「こういう闘いにおいては使えるんだな。その能力」

「あら？貴方以外にならこういう闘い以外にも使えるのよ？」
まあ、そりゃあそうか。接近戦でも境界を操って相手を動けなくすれば一方的に攻撃できるしな。改めてチート能力だと思う。俺も人（妖）のことは言えないが

「さあ・・・どうしたものか・・・」
手が無くもないのだがそれはかなり危険なのだ。まあ俺に危険なんてあってないようなものだが。

「どんどん行くわよ！」

「くっ！」
しだいに早くなっていく弾幕。それを避け続ける。このままではまずい

「悪いけどこのまま勝たせてもらうわ」
紫が力をためる。きっと大技を使ってくるのだろう。

そしてためた力を紫が放つ。すると縦に並んだ小さな弾幕を時計回りに放ってきた。

おかしい。力を溜めておいてこんな簡単な弾幕なはずが無い。
そう思いながら弾幕を避けていると紫が今放っている弾幕に加え縦に並んだ中くらいの弾幕を反時計回りに放つ。

っ！まさかこの弾幕は原作で言う『結界「生と死の境界」』か！？

だとしたら早く止めないと面倒なことになる！
仕方ない、先ほど考えた作戦を実行するしかない！

俺は少し紫に近づきさっきのように弾幕を放つ。すると紫は弾幕を放ちながらスキマで移動しようとする。
チャンスは一瞬。ばれたら次は使えない作戦だ。確実に決める。
俺はスキマで移動しようとする紫に一気に近づく。丁度スキマに入った紫は急いでスキマを閉じようとする。が、この距離なら間に合う。
スキマが閉じる前にありったけの弾幕をスキマの中に叩き込む。
そうすると紫がすぐに出口のスキマを開き俺の放った弾幕と共に出てくる。そのときに紫は先ほどの弾幕に加え大きめの赤い弾幕を時計回りに放つ。
俺は風の力を使い紫の弾幕と俺の弾幕が混じって密度の高くなった弾幕を縫うように避けながら紫に近づく。弾幕のおかげで紫からは俺が見えないはず。

そのまま弾幕を抜けて紫の目の前に現れる。

「捉えた」

「なっ！」

再び俺はありったけの弾幕を再び放つ。

ズドドドオオオオオオオオオオオン

紫は俺が放った弾幕に命中し倒れていた

○

「私の負けよ・・・いくならいくといいわ」

「ああ、そうさせてもらう」

俺が行こうとしたとき紫が尋ねてきた

「貴方は・・・なぜそこに行きたがるの？」

「どうしてだと思う？」

「わからないから聞いてるんじゃない」

ふむ、それもそうか

「その洞窟はおそらく『未来』につながっているだろう」

「「未来！？」

鬼神と紫が同時にそういった

「ちょっとまて。どういうことだ。じゃあ昔に調査させた天狗は未来に居るとでもいうのか！」

「ああ、そうだろうな」

「ならなぜ帰ってこない！」

「それは・・・おそらくだが戻ってこれないのだろう。何らかの事故や事情でな」

未来へついた先が『幻と実体の境界』完成後の時代だったら天狗という種族が故に幻想郷に引きずりこまれてるだろうが

「そもそも何で未来に通じてるってわかるのよ」

紫の厳しい一言。だが紫に一度通ってやってきたなんていう訳にも行かない。

「俺の能力でわかる」

こういっておくのが一番だろう

「そう・・・ならこれが最後の質問よ。なぜ貴方は未来に行くのかしら？」

「それは教えられないな。」

すまない。これだけはいえない。

「そう・・・」

「鬼神。洞窟へ案内してくれ」

「私にお前を止める権利は無い。・・・いくよ」

○

「どうしても行くのか？」

「ああ」

「なら・・・絶対に戻って来い。」

「当然だ」

確かに俺が生まれたのは『未来』だ。でも今の俺にとっては『過去』が自分の居るべき場所だ。

『未来』から『過去』に来る前に起こしてしまった過ちを正してまた帰ってくるさ。

「あいつに言っておいてくれ。『すまない』と」

「・・・わかった」
誰とは言わなかったが鬼神も納得してくれた。

必ず、未来での過ちを変え、この時代に戻ってくると誓って俺は洞窟を進んだ

第一〇話　～弾幕、山に舞う～（後書き）

久々に書くとあらためて難しく感じます。
話の流れは完結まで考えてあるけどそれを文にしていくとなるとまた勝手が違う・・・。どうしたものか・・・

感想、アドバイス、批判などありましたらどしどし送ってください。

あと、描写が足りないので伝わりにくいですが鬼神は女です。

第一一話　～今とフラワーマスター～（前書き）

どうも、箪笥です。いつもよりは早く投稿出来たかな？それでもほかの筆者様に比べると遅いけど。
で、今回の話ですが前話のフラグなんてなかったように進みます。
１１話が塵の過去（未来）の話だとおもっていた方。申し訳ありません。
あっやめて石投げないで！え？弾幕はもっとやめて！

ピチューン

「・・・えー、箪笥が被弾して消えたので変わりに言わせてもらうと話が一気に飛ぶ。箪笥いわく『こうしたほうが後々都合がいいから』だそうだ。」

箪笥＆塵「では第一一話どうぞ！」

第二一話　～今とフラワーマスター～

妖怪の山で起きた事件から数千・・・いや1万年は過ぎただろうか？
時代で言うと大体奈良時代の少し前、つまり竹取物語が始まる少し前だ

俺は今、妖怪退治屋のようなものをして暮らしている。まあ一種の暇つぶしだ。
退治といっても人に危害を加えなかったりする妖怪は依頼を受けても見逃していたりする。

紫は自分の理想郷（幻想郷）をつくるために奮闘しているとか。
紫とは今でもあって理想郷のことなどの話をしている。最後になったのはどれくらい前だったか・・・。

因みに『未来』から帰ってきて1万年間の間何をしてきたかというと刀を作りひたすら修行していた。
かなりの量の刀があるのだが、今使っている2本を紹介する。

1本目が
名前：無双刀（むそうとう）
能力：形を自由に変える程度の能力
説明：この刀は抜刀するときこめた力（妖力・霊力などすべての）の量や強さによって形　　や切れ味などが変化する。
　ただ、元々切れ味などが通常の刀より優れているため力を込めずに抜刀しても十　　分使える。

そして2本目

名前：夢想刀（むそうとう）
能力：見えない程度の能力。
説明：この刀は鞘から抜かれた瞬間から鞘に収められるまでの間この刀を鞘から抜いた　　者にしか見えなくなる。
　なので暗殺などにも使える。普通の刀に比べ少し短い

戦うときは右手に無双刀を、左手に夢想刀を持つ二刀流スタイルだ。
また、作った刀をどうしても譲ってほしいと頼まれたので1本譲ったところ、
その刀は『楼観剣』と呼ばれてさまざまな人の手に渡っているらしい。ナンテコッタイ、正体不明の妖怪って俺だったのか。

と、まあ刀に関してはこんなものか。
「で、何のようだ？紫」

「あら、いつから気づいていたのかしら？」

「この紙に夢想刀の説明を書き始めたあたりからだ」

「最初から気づいてんじゃない」

「さいですか。」
因みに紫が来るときはいつもこんな感じのやり取りで始まる

「それはそうと今日こそ教えてもらうわよ」

「やっぱりそのことか・・・」

「あの時『未来』へ行って何があったか話してもらうわ！」

「だからその話は時が来たら話すといってるだろう」
まったく・・・いつになったら諦めてくれるのか

「いつもそれじゃない」

「それよりお前、理想郷のほうはどうした。こんなところで油を売って居ていいのか？」

「そうやっていつも話しをはぐらかす」
殺気を出してまで睨まなくてもいいだろう・・・

「・・・その殺気と妖気を消せ。そろそろ客が来る」

「それに何で貴方は妖怪なのに妖怪退治なんかしてるんだか・・・」

「・・・その話をここに居るときはするなと言っただろう」
紫を睨む。ここに居るやつらにばれたら面倒だから。

ドンドン
ドアをノックする音が聞こえる

「ハイ、今出ますよ」
ドアを開けて客を中に入れる。

「えーと、用件は？」

「その前にそこに居る方は？」
といって紫を指差す。

「ちょっとした友人だから気にしないでくれ」

「そ、そうですか・・・用件は言うまでも無く妖怪のことなんですが・・・」

「その妖怪の特徴、主な活動場所、被害をわかる程度に」

「特徴はわからないですが活動場所はここから近くの山の向日葵畑で被害は退治をしに行った陰陽師が数名です・・・」

「ふむふむ・・・」
特徴がわからないから確実とはいえないがおそらく「風見幽香」だろう。というか向日葵畑を主な活動場所にする妖怪を知らないのだが。

「どうにかお願いできないでしょうか？」

「わかった。引き受けよう」

「ありがとうございます！」

○

「で、なんでお前がついてきてるんだ？」
山道を歩いているときに紫に尋ねる。

「あら？悪いかしら」

「仕事の邪魔だ」

「別に一人増えた程度で邪魔にならないでしょ？」

「お前よりも強いやつが出てきたらどうするんだ？」

「そのときは貴方に守ってもらうわ」

「あのなぁ・・・」
この流れもいつもどおりの流れで結局俺が折れて紫がついてくる。

「しっかしどこまで歩いても木、木、木だな」

「向日葵畑まであと半刻はかかるわよ？」

「なんでわかるんだ？」

「計算したわ」
マジっすか

「半刻あるってわかったらめんどくさくなってきた」

「能力使えばいいじゃない」

「戦う前に余計な力を使いたくない」
本当は風の力を使うと後で放電しなきゃいけなくなるから嫌なだけだが。

「じゃあ歩いていくしかないわね」

「仕方ない。走るか」

「そう。勝手にすればいじゃ・・・走ったほうが疲れないかしら？」
そんな言葉が聞こえたような気がしたが悪いな。その言葉を言い終わるころにはたぶん目的地についてるだろう。

「本当に走って行ったのかしら・・・」
紫が一人そうつぶやいた

○

というわけで向日葵畑に着いた。向日葵が咲いている以外何も無い。

「そこの貴方？ここには何の用かしら？」

後ろから話しかけられる

「ここには綺麗な向日葵畑があると噂を聞いてね。噂どおりでよかった。それで貴方は？」

振り向かず向日葵を見たまま話かける。

「私？私はこの向日葵畑を管理してるのよ。綺麗と言って貰えるとうれしいわ」

「そうか」

「でも気をつけて。ここには恐ろしい妖怪が居るから。」

「俺は大丈夫だ。貴方こそ大丈夫なのか？ここで向日葵を管理してるといったが」

会話を続けていく

「私も大丈夫よ。そこらへんの妖怪より強いし、その妖怪・・・」

「私だもの！」「お前だから」

ほぼ同時だった。その声を発したのも、攻撃のために動いたのも。

カンッ！

俺が抜いた無双刀と相手の持っている傘がぶつかり合う。

「驚いたわ。私の一撃を止めるなんて」

「そいつはどうも」

シュッ　カンッカンカンカン

再び傘と刀がぶつかりあう。

「さしずめ貴方は私を退治しに来たのかしら？」

「なんだ。こころあたりがあるんじゃないか」

「ええ。降りかかってきた火の粉を払っただけよ。たいして強くなかったから面白くなかったけど」

「・・・なんだ」

刀をしまう

「あら？降参でもするのかしら？」

「いや。お前を退治する理由が無くなったからな」

「ふーん・・・たいした自信だったみたいね。私を倒せること前提じゃない。そして貴方は帰ろうとしている」

「ああ」

「でも・・・私は貴方を逃がさないわ。妖怪にもプライドはあるのよ？」

「できれば殺したくないんだがな」

「人間風情がよく言うわ」

「そうか・・・人間風情かどうかは戦ってみてから言いな。紫、いつもどおり手は出すなよ？」

「はいはいわかってるわよ」

いつの間にか待機していた。紫がそういう。

「あら。仲間が居たの？それも妖怪の」

「まあちょっとした友人だ」

「まあいいわ。行くわよ！」

そして再び刀と傘がぶつかりあい――――

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第一一話　～今とフラワーマスター～（後書き）

第一一話どうだったでしょうか？

次回：ＶＳフラワーマスター！

感想・意見・批判などありましたらいただけるとうれしいです

第１２話　～ＶＳフラワーマスター～（前書き）

どうも、箪笥です。

少し前から気がついている人も多いかもしれませんが、小説に章を作らせてもらいました。・・・・これいるのかなぁ・・・

では第１２話　どうぞ

第１２話　～ＶＳフラワーマスター～

「行くわよ」
その掛け声と共に傘と刀がぶつかり・・・

「ちょっと待った」
あう前に俺が声をかけた

「！？何よ。いまさら怖気付いたとでも言うの？」

「場所を移さないか？俺たちがぶつかりあったらおそらく辺り一面は無事じゃ済まないだろう。俺もこの綺麗な向日葵を傷つけるのは心苦しい」
それにここじゃお前も本気が出せないだろう。と、心の中で付け足す。

「私もこの子たちを傷つけるのは嫌よ。だから守りながら戦おうと思っていたのだけれだも。・・・私を花の無い場所に連れ出すということは本気を出してもいいということよね？」
やはり花を傷つけるのは嫌なようだ。・・・最後に強者が弱者をいじめるときのような笑みを漏らしていたのは触れないでおこう。

「それで場所だが・・・」

「もう少しこの山を登ったところに丁度いい場所があるわ。先に行ってるから必ず来なさいよ」
そういうと幽香は飛んで行った。ん・・・？飛ぶ・・・？

「塵？移動をどうするの？まさかまた走るとか言うんじゃないでし

ょうね？」

「・・・そうか！飛べばいいのか！」

俺は何を忘れていたんだろうか？こんな簡単なことじゃないか。

「へ？」

紫が「何よそれ？」と言いたげな顔でこちらを見ている。

「いや、飛べるってことを自分でも忘れてた。先に行ってるから来るなら来いよ」

そう言って俺はここを後にした。

「またおいてかれたわ・・・」

紫がそう呟いたのも聞かずに・・・。

○

「あら？遅かったじゃない。怖くなって逃げたのかと思ったわ」

「すまんな。久しぶりに飛んだからうまく飛べなくてな」

「ふうん・・・まあいいわ。私を本気にさせる場所まで移動させたんだから少しは楽しませてもらうわよ？」

こいつ笑ってやがる。絶対Sだろ・・・。っと今はそんなことはど

うでもいい。

「さあな・・・行くぞ」

シュッ、カン、カン、キン

先ほどのように刀と傘がぶつかり合い音を立てる

「まったく、刀とぶつかり合ってもなんとも無い傘ってどうよ？」

「当たり前じゃない。世界で唯一枯れない花なのよ」
その台詞どっかで聞いたことが・・・まあいいか。しかしこのまま
ぶつかり合っても埒が明かないのは目に見えてる。

「闘いの最中に考えてると隙を生むわよ？」
気がつくと幽香がすぐそこまで来ていた。

「しまっ」

ドゴオオオオオオオオオン

幽香のスピードが予想以上の速さだった。まったく・・・悪い癖だ
な。闘いの最中に考えすぎるのは直さなければ

「あら？まだ生きているのかしら。やっぱり普通の人間とは違う見
たいね。でもそうでなくちゃ面白くない！」

「へっ、こんなのでくたばってたら退治屋つとまんねーの」

「貴方の力を見せて頂戴？私が楽しめるように！」
再び幽香が接近してくる。が、一度見た速さなので　反応し避ける。
幽香はそのまま連撃を繰り出す。それを紙一重で避けていく。

「ちょこまかと・・・！」
先ほどまで傘での攻撃はなぎ払いだったのだがいきなり突きをしてきた

「ハァァァッ！」
傘の先にエネルギーがたまっていく。・・・まさか元祖マスタースパークか！？まずいっ

「くっ！」
勢いをつけて納刀しながら後ろに下がる。

「吹き飛べっ！」
超極太のマスタースパークが飛んでくる。

「こんなもん零距離で打たれて回避できるかっ！」
避けれないならどうすればいいか？そんなの簡単さ。防げばいい！

「ハァァァア！」
無双刀に力を注ぐ。そしてマスタースパークが目の前に来たところで抜刀しそのままそのマスタースパークを切る。

するとマスタースパークはそのまま二つに分かれて後ろへと飛んで行った。この間約５秒

「なっ！」
幽香が少しあわてている。
「さすがに危なかったぜ」
あんなもんまともに受けてたらなんて考えると身震いする。
「ふふ・・・フフフ・・・」
「あ、あれ？大丈夫か？」
いきなり笑い出されるとこっちが怖くなる。
「いいわ・・・徹底的につぶしてあげる・・・ふふふ・・・」
あれー？なんかやばいことになってるような・・・？
「できれば降参してほしかったんだけどなぁ・・・」
「降参？するわけ無いじゃない。こんな楽しいのに？ふふふ・・・
行くわ」
「っ！」
さっきより数段階早い。だが追いつけない速さでは無い！
幽香は傘で攻撃する以外に蹴りなどの体術も使ってくるようになった
幽香の傘を夢想刀で受け止め、その勢いのまま無双刀でカウンター
を仕掛ける。
幽香が後ろに下がりそれをかわす。そして傘先からマスタースパー
クとは違った妖力弾を放つ。
ジャンプでを回避しながら背後に回り込み蹴り飛ばす。

「くっ！まだまだよ！」
傘の攻撃を無双刀で受け止めつばぜり合いになる。
「はあああああああ！」
本当にどうなってんだよ。傘が刀で切れない硬さとか。
「チィッ、このままじゃ埒があかねぇ。ラストに大きなぶつかりあいと行こうぜ」
「いいわ。この一撃勝負に負けたほうの負けね？後悔はしないわね・・・？」
「その言葉、そっくりそのままお前に返させてもらう」
互いに睨みあいすべての力を一点にためる。
「行くわ」
「来い」
「「はあああああああああああ！！！！！！」」
互いに溜めていた力を一気に放つ。そしてぶつかり合い――――
ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン
その音はその一帯に響いたと言う

○

side　紫

今回の闘いはいつもに比べて面白かったわ。
でも一つ気になることがあったのよね。なぜ塵は相手と同じ程度の実力しか出さなかったのかしら？

私は忘れていない。塵が鬼神と闘ったときに出した力を。
そう、あの時は自分の力の制御の一つを開放した。しかし今回は開放しなかった。相手の実力からしたら開放したほうがよかった戦いであるのは事実である。

彼は私の理想郷の夢の実現を手伝ってくれている。しかし私は彼のことを何も知らない。

私はもう少し彼を観察する必要があるようだ。

side　out

第１２話　～ＶＳフラワーマスター～（後書き）

書いてからおもった。戦闘描写は第三者視点のほうがいいと。

感想・意見・批判などありましたらいつもどおり募集しているのでどしどしお送りください

第一参話　～フラワーマスター宅にて～（前書き）

今回は戦いの後のちょっとした話なので短いです。
大体いつもの三分の一ぐらいかな？

それではどうぞ

第一参話　～フラワーマスター宅にて～

ｓｉｄｅ　幽香

私は目を開ける。なぜ？寝ていたから。いや、違う。
私は闘っていた。では寝ていた？そう、負けたのだ。最大出力の技を破られて。
それだったらなぜ私は私の家に居る？
そう考えながら意識を覚醒させ辺りを見回す。

居た。あの男だ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　塵

俺はあの戦いの後幽香を彼女の家に運んだ。因みに紫は仕事があるといって帰ってしまった。
殺す気で戦っていない相手を倒してそのまま行くほど情なしではない。

そんなことを考えていると幽香が目を覚ました。
「ん？目が覚めたか。気分はどうだ？」
「最低よ。貴方に負けた上に助けられるなんてね」
「そうかい」
まあそう帰ってくるのは予想していたが。
「それに何勝手に家に上がりこんでるのよ」
「生きてるやつをほおって置くわけにも行かないだろ？」
「・・・ただの人間の癖に」
「おっと。ただの人間という認識は改めてもらわないと困る」
まあ妖力は完全に隠していたからわかるはずも無いのだが。
「どういうことよ」
「こういうこと」
妖力を少し開放する。
「まさか妖怪だったなんてね。・・・なら」
「なら？」

「なぜ妖怪退治をしていて、私を見逃すつもりなのかしら？妖怪なのに」

「別にたいして悪いことしてるわけじゃないから。妖怪も小妖怪辺りなら人間の都合だけで殺されちまうこともある。すべての妖怪がそうである必要はねぇだろ？」

これが俺の考え方だ。

「ふーん・・・妖怪の妖怪退治屋ねぇ・・・」

「妖怪退治屋っていうか、戦うことに関しての何でも屋って感じだな」

実際、強くなりたいとか陰陽師になりたいとか言って弟子入りを求めてくるやつも少なくない。

が、すべて断っている。理由としては妖怪ってことがばれるとめんどくさいから。

まあただ門前払いってのも仕事にならんから多少の稽古をつけてたりはする。

「まあいいわ。次ぎあったときはこの仮を変えさせてもらうわよ」

次あったら戦うこと前提ですか。

「そうか、楽しみにしているぞ？では、いくとするかな」

実は戦うことが嫌いなわけではないのだが。

幽香の家を出て人里に向けて飛んだとき村人に見つかりそうになったのはまた別のお話。

第一参話　～フラワーマスター宅にて～（後書き）

第一参話どうだったでしょうか？とても短いですが。

うーん。やっぱ描写とかが苦手だから会話だけになるのを何とかしたいなぁ・・・

そういえばふとおもったんですが、この小説って人気あるのでしょうか？

別にあってもなくても不定期に書き続けるだけなのですがね。

感想・訂正・アドバイス・批判などありましたらいつもどおりお待ちしております

第一？話　～藤原の娘～（前書き）

どうも箪笥です。最近鬱です。言いたいことはそれだけです。

因みにこの話は導入部ということで短めです。

それでは第一？話　どうぞ～

第一？話　～藤原の娘～

幽香との戦いから数年がたった。
俺は不老なので体的な意味で成長しないので怪しまれないように各地を転々としている。
そして今は都に来ていて知名度０から再び仕事をしている。

はずだったのだが幽香に勝ったのが大きかったのか知らない間に有名人になっていたらしくいろいろと忙しい。
なのでここにも長居はできないようだ。せっかくの都なのでしばらくいるつもりだったんだが・・・

「っと、そろそろかな？」
俺は筆を動かすのをやめ、しまう。
それと同時に玄関をノックする音が聞こえる。
「はいはい。今出ますよ」
玄関を開けるとそこには一人の男性と少女が立っていた。
「とりあえずあがってください」

「ああ、すまない」
そんなやり取りをして家の中に入る
「それで用件は？」
「単刀直入に言うと娘を立派な陰陽師にしてほしい」
つまり自分の娘を俺の弟子にしてほしいと
「何でまた陰陽師を？」
「何があるかわからないからこの子には強くなってもらいたいのだ。」
「しかし彼女はまだ子供ですよ？」
いくら強くなってほしいからって子供に陰陽師になってほしいというのは無理があるだろう
「我が子だからこそ早いうちに強くなってもらいたいのだ！」
「本人はどうなんです？」
「父上が強くなれと申すのなら私はやります！」
「先に言っておくが俺の戦い方は刀がメインだ。陰陽道に関しては詳しくない。」
まあ刀をメインに妖力を使ってますなんて言えないわな
「それでもいい。娘が強くなってくれるならな・・・」

「・・・とりあえず1日だけ預かる。話はそれからだ」
甘いな・・・俺も
「「！　お願いします！」」

○

というわけで1日彼女を預かりいろいろ調べた結果強さは弱の上だった。これだけ聞くと弱そうに聞こえるがなかなかすごい
この基準は強の上が紫や鬼神あたり、強の下が幽香や鬼の四天王、中の上は一般の鬼、中の下は一般天狗、下の上は小妖怪という感じだ。
因みに普通の人間は修行して中の下、才能があれば中の強ぐらいまではいける。
しかし彼女はどう見ても子供でかつ女なことを考えれば弱の上はすごすぎるぐらいだ。

「そういえば名前はなんていうんだ？」
「私の名前は藤原　妹紅といいます」

な、なんだってー！髪が黒だったし原作の様にもんぺ履いてなかったから気がつかなかった。
まだ不老不死の薬を飲んでないから髪が白くないのはあたりまえだが。

「？　どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもない。大丈夫だ。少し驚いただけだ」
しかし妹紅が居るということはもう少しで竹取物語が始まるのか？
ということはあと千年と数百年で原作が始まるのか？俺が話に関与してる時点では原作とは言いがたいが。

どうしたものか・・・本当は断って帰ってもらおうと思ったんだがな。

しかしなぜ妹紅をそんなに強くしてほしいんだ？まさかほかに目的があるとか？
例えば望まれない子っていう設定だから早く自立させて自分からとうざけたいとか？
まったくもってわからん。

仕方ない。今回の依頼を受けよう。もし断ったら幻想郷ができるまであえないかも知れないしな。

○

次の日、世間の人から驚かれたのは言うまでもないだろう。

そして俺が始めて幼児愛好者（ロリコン）と呼ばれたのはまた別のお話

第一？話　～藤原の娘～（後書き）

どうでしたでしょうか？前話と同じく短いですが。

そうそう。今さっき某市場で紅魔郷と妖々夢、永夜抄を注文しました。

塵「あれ？お前原作全部やってなかったのか？」

風しかやったことありませんでした。ちなみに実力はノーマルで文に勝てない程度です。めっちゃ下手です。パターン化？なにそれおいしいの？

塵「おまえよくそれで小説書く気になったな」

書きたくなったものは仕方ない。

ああ、そうそう。次の話からはいつもどおり２５００文字前後で書いていきます。

塵・箪「「それでは次話をお楽しみに！」」

感想・訂正・アドバイス・批判などありましたらいつもどおりお待ちしております

第一語話　～授業と竹取の翁と初めての妖怪～（前書き）

どうも箪笥です。東方やってたら更新遅くなってしまいました。
で、どこまで進んだかというと
紅と妖はイージーでも撃沈。夜はイージーこそノーコン余裕だけど
ノーマルはうどんげに会うのが精一杯という情けない状況。どんだけ俺ＳＴＧ下手なんだよｏｒｚ

まあそんなたわごとはおいておいて、小説のほうを突っ込むといつもながら展開が速いなぁと自分でも突っ込んでみたり。

そんな感じですがそれでも読んでくれる方は
第一語話、どうぞ！

第一語話　～授業と竹取の翁と初めての妖怪～

「これが霊力だ」
自分の霊力に色をつけて見せる。

「先生！霊力って誰にでもあるんですか？」
元気よく手を上げ俺に質問する妹紅

「いい質問だな。霊力ってのは基本的に誰にでもある。因みに妖怪が使う力は妖力という」
俺が基本的なことを教え、それに対して気になったことを妹紅が質問し、それに答えるという感じで教えている。

「先生、霊力ってあると何ができるんですか？」

「んー・・・そうだな簡単にいうと妖怪と戦ったりすることができる。札に霊力を込めて攻撃したり結界を張って護ったりするのに使うことが多いな」
まあ俺が使うのはもっぱら妖力なんだが。

「ん？妹紅、ちょっと待ってろ」

「あ、はい！」
そう返事をした妹紅を庭で待たせて、家の中に入る。

「まったく、何のようだ？紫」
すると何も無い空間が裂けてそこから紫が出てくる。

「貴方が珍しく弟子をとったときいてね。ちょっと見てみたいと思ったのよ」

「来るのは勝手だがスキマで来るのはやめろ。もし見られたらどうする？」

「次からは気をつけるわ」
まあこう言っても次来る時は忘れてるんだが

「まあおれは戻るぞ」
妹紅を長く待たせるのもいけないので庭に戻る

「すまん、待たせたな」

「あの、そちらの方は？」

「私？私は紫よ。塵の友人ね」

「よろしくお願いします！」

「ええ、よろしく」

「と、まあ紫が見学することになったが特に気にすることは無い」
別に見られて困るような内容の授業じゃないし

「えーと、どこまで教えたかな？ああ、霊力のことか。そう、霊力

を使えばこんなこともできるぞ」
霊力の玉を作る。それをあらかじめ立てておいた木の枝に投げる。
すると木の枝が空を舞った。

「す・・・すごいですね」

「おいおい、他人事じゃ困るんだ。お前にもこれができるようになってもらわないといけないんだから」
それにこれはまだ簡単なほうだしな。

「ハイ！」

と、まあこんな感じで授業が続いた

○

「妹紅、おまえはさびしくないのか？」

「少しさびしいですけど父上が言うならそれに従います」
妹紅の父親、藤原不比等は妹紅を俺のところにおくように言った。
俺にはどうもこの行動は妹紅を自分から遠ざけているようにしか思えない。
しかし遠ざける理由がわからない。ただ単に存在を隠したいならもっと良い方法がほかにあっただろう。

仮に俺の指導で妹紅が有名な陰陽師になったとしたら隠すどころの騒ぎではなくなる。
本当に訳がわからない。

「？　どうかしました？」

「ん、いやなんでもない。それよりももう寝る時間だぞ。寝た寝た」

「はい。お休みなさい」

それから数分後、妹紅が寝たのを確認した後起きる。
俺は能力ゆえに寝ることができないので、（正確には能力を解除して練ることはできるが数億年位寝てないので数年間は寝てしまうだろう）妹紅に人間ではないことをばれないために寝たふりをしている。
といっても修行するしかする事が無いので庭で刀の手入れと修行をすることにした。

○

それから数年たち妹紅も成長しそこらへんの陰陽師や妖怪退治屋顔負けの強さになった。

「で、依頼というのは？」

「実は・・・ワシの娘が月から月の使者が来て月に帰らねばならないというのじゃ」

「それで？」

まあ何がいいたいか分かるが

「護衛を頼みたいのじゃ」

「日時は？」

「次の満月の夜じゃ」

とまあ上の会話から分かるが竹取物語で言う竹取の翁と依頼の話をしている。

この数年間で起こったことをまとめると。

竹取の翁が輝夜を竹林で見つけ、その美しさに多くの人が求愛し、その中で5人が5つの難題と呼ばれる問題を受けるが全員失敗し恥をかいた。その中には妹紅の父、藤原不比等も居る。そして帝もその話を聞き求愛したが断られる。

と、ここまでは竹取物語どおり進んでいた。
この話が進んでいくにつれ藤原不比等が妹紅から離れて行き、（それまではなんだかんだで修行風景を見ていた）
妹紅がそれに不満を持つようになり少しずつ輝夜を恨み始めた。

そして輝夜が月に帰らねばならないと言い出し竹取の翁が月に帰すまいといろいろなところの陰陽師やら妖怪退治屋やらに頼み込んでいる。

「ふむ、分かった引き受けよう」
因みにこの会話は妹紅に聞かれないように適当に走りこみの指示をして家から出て行ってもらっている

「本当か！？では次の満月の夜、頼んだぞ！」
そういうと翁はすぐに家を出て行ってしまった。おそらく他のところも回っていくのだろう

「ただいま戻りました！」
翁とすれ違いで元気な声と共に妹紅が帰ってくる

「おう、お帰り」

「いまおじいさんが出て行ったようですがもしかして依頼ですか？」

「ああ、そうだ」

「やった！」

「今回の依頼にお前は連れて行かんぞ？」
この依頼に妹紅を連れて行ったら大変なことになりそうだ

「えー？何でですか！？」

「まあそういうな。お前はまだ若い。まだまだ長い時を生きるんだ。
依頼なんていくらでも受けれるだろう？」
いろいろな意味で・・・な

「むー・・・分かりました」

しかし妹紅を最初に依頼に連れて行ったときは大変だった。
たしかあれは――――

○

「妹紅、妖怪退治に行くぞ」

「妖怪退治・・・ですか？」
「ああそうだ。ただ訓練をするだけでは強くなれないのだ。実践があって強くなれるものだ」
「・・・はい！」
うむ。いい返事だ。
「ただ気をつけろよ？相手は妖怪だ。油断してるとやられちまうぞ？」
「大丈夫ですよ。油断はしません」
妖怪を前にしたらそんなこともいえなくなりそうだがな。妹紅もまだ子供。恐怖に立ち向かうとなると考えなんてなくなっちまうからな

そんなかんだで歩くこと数十分。とある山に付いた。
「いいか？妖怪をおびき寄せるときは殺気を消して霊力を抑えるんだ。ただの通行人を装うためにな」
「はい・・・こうですか？」
「そうだ。こうして歩いて居れば・・・思ったより早く来たな」
こうして簡単におびき寄せられるやつはバカか力の弱いやつぐらいだ
「グルルルルル」
泣き声から人語を理解することはできないと判断。これを妹紅に任せたら・・・どうなるかな？

「妹紅。これは一種の試験だ。こいつに勝て」
「え？ちょっとまってくださ　って危ない！」
妖怪が妹紅に向かって噛み付く。それをぎりぎりで避ける。
「ガルルルル！」
一回で殺せなかったことにイラついている様だ
「えっと、妖怪と戦うときは札を持って・・・霊力を込めて投げる！」
シュッ　シュッ　シュッ　と音を立て妹紅が投げた札が妖怪に当たる。が、
「ガグルルルルッル！」
ひるむことも無く突進を仕掛けてくる。
「クッ！」
霊力の玉を投げながら回避する。投げた玉が妖怪に当たり、砂埃が舞い上がり視界がさえぎられる。
「グルガアアアア」
妖怪の噛み付きに対処できず少し傷を負ってしまう
「なんで！」
札を投げる
「何で！何で！」
霊力の玉もさらに投げる！

「なんでなんで」
あー、こりゃまずいな。止めないとパニックで大変なことになりそうだ。少し手荒だが・・・仕方ない。
妹紅の背後に回りこんで人が気絶する程度の力で妹紅を殴り気絶させる。
まあ今回は初めてだったし妹紅もがんばったほうだろう。

「グルルルル！」

「あーもううるさいな。黙ってな！」
妹紅を背負いながら無双刀を取り出し妖怪を真っ二つに斬る。
さすがに妹紅がおきてたらこんなことはできない。

「さて、妖怪退治も終わったしかえるかねぇ」

そういって俺は山を後にした

第一語話　～授業と竹取の翁と初めての妖怪～（後書き）

第一語話、どうだったでしょうか？

この話を書いているときふとおもったんですが他の書き手さんと交流ってしたほうがいいんですかねぇ？どうも自分から声をかけるのは苦手で＾＾；

いつもどおり批判、感想、アドバイス、訂正したほうがいい点などありましたらお待ちしております

第一ｓｉｘ話　～月人再び～（前書き）

どうも箪笥です。
今回はやっちまった感が・・・
そんな感じです。

また今回はいつもより５００文字ほど少ないです。
理由はそこで切らないと結構長くなってしまうからです

それでは第一ｓｉｘ話　どうぞ

第一ｓｉｘ話　～月人再び～

ｓｉｄｅ　塵

時は満月の夜、舞台は竹取の翁の家。

普段は求婚者たちしか来ないこの家だが今日は違う。
兵、それも武装した兵達がこの家を囲んでいる。
それもそうであろう。今日はかぐや姫、つまり輝夜が月に帰らねばならない日である。

「ま、こんだけ居ても無駄なんだがな。原作の設定通りになってくれることを祈るだけだ」

因みに俺の配属場所は輝夜の部屋の前で難題に挑んだ５人や、有名な妖怪退治屋、陰陽師が集中しているところである。

「きたぞおおおおおおお！」
その声と共にあたりに緊張が走る。皆がいっせいに見上げると月の近くでなにやら光っているのが見える。
その光は徐々に大きく、いや、近づいてきている。
本当は月人の顔はもう見たくなかったんだけどね。まあ、永琳と輝夜は除いてだが。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　妹紅

師匠は付いて来るなといってたけどやっぱり我慢できない！
・・・気づかれかければ大丈夫だよね？

とか思いながらこっそり師匠の後ろを付いて行く。

しかし今日は夜なのに人が多いなぁ。もしかしてこれ全員兵士！？
こんなに戦う人が同じところに集まるってことはよほど手ごわい妖怪なのかな？

私が再び人影に戻って師匠の後を付けること数十分

私は見覚えのあるお屋敷に着いた。
まさかあの女に関する依頼ってこと！？
だとしたら父上も居るかもしれない。

私は庭の茂みの影に忍び込んで見守ることにした。

side　out

side　塵

先ほど月から出てきた光は弓の射程範囲の少し前で止まった。
するとその光はさらに強い光を放った。
するとたちまち兵士たちは動けなくなってしまい。ついには武器を
も落としてしまった。
俺は能力で防いだが非常事態が起きるまで動かないようにする。
すると光の中から人が出てきた。遠くてよく見えないがおそらく永
琳だろう。
そのまま部屋の中へ入っていった。
俺は見逃さなかった。永琳が部屋に入るときひそかに俺のほうを向
いて合図を送ったのを。
まあばれない様に部屋に来いということだろう。
霊力で自分の立っているところに分身を作り、風の力を使いばれな
いように部屋に移動する。

「永琳！私・・・」

「わかっています。姫様。月に帰りたくないのですね？」

「そうなの！」

「ふーん・・・で、永琳。なぜ俺を呼んだ。
風の力で部屋に入ると輝夜と永琳が話をしていた。

「！　誰？」

「俺か？俺の名前は異界　塵。そうだな・・・永琳の古い知り合いだな」

「そうね。何億年ぶりかしら？」
まあそうだなそれぐらいになるのか

「な、何億！？」
どうやら輝夜は知らなかったらしい

「で？どうするんだ？このままここに隠れてるわけにもいけないだろ？」

「だから貴方を呼んだんじゃない」

「つまり強行突破すると？」

「無理よ！3人で月の力に勝てるとでも？」
「なーに言ってるんだ。こっちはお前らを逃がさなきゃいけないんだから戦うのは一人だろ？」
「あの数を相手に一人で戦うって本気で言ってるの！？」
そんなに居るのか？ぱっと見た感じあんまり居なかったが。
「いいえ、姫様。塵にならできるのよ。」
「で、作戦は？考えてあるんだろう？」
「ええ、まず私が姫様を連れて行くふりをするわ。そのあとあの車を占拠して私たちは逃げるの」
「で、俺が追っての足止めをすると。」
なんだかんだで結局俺はかかわらなきゃいかんのか。
「じゃあ姫様。行きますよ」
「・・・わかったわ」
輝夜もしぶしぶその作戦を呑んだようだ。
「それじゃあ・・・無事を祈るぞ」
「ええ、貴方こそ」
会話を終えた後俺は分身をおいておいた場所に移動し待機する。
するとすぐに永琳と輝夜が出てくる。
そのまま光の中へと消えていく。

その刹那。光から一つの影が落ちていくのが見えた。
そしてその光は月とは違う方向に動き出した。

そして俺はこのまま月人の攻撃を防げばいい。それだけのはずだった。

しかしその計画は儚くも崩れ去ったのだ。

偶然、というべきなのだろうか。
偶々永琳たちが乗った光が影に隠れ、
偶々月人が放った玉の流れ弾が兵士に当たり、

偶々兵士たちが動けるようになってしまい、
偶々兵士が放った矢が月人に当たり、
偶々その月人が偉い役職で――――

月人がこちらに攻撃してきたのだ
「マジかよっ！」
「怯むな！打てー！打てー！」
兵士長が指令を出す。
だが相手は月人、装備の力の差で圧倒的に押されている
くっ！どうする？このままでは兵士達が危ない！この状況じゃ飛べないので永琳たちの護衛もできない！
そのときある叫び声が聞こえた。しかも聞き覚えのある声だ。
「うわあああああ！」
こ、この声はまさか！
あわてて振り返るとそこには妹紅の姿があった

くそっ！霊気やら霊力やらが混じってて気が付かなかった！
このままだと妹紅が危ない。そう思って走って救出する。
それと同時に先ほどまで妹紅が立っていた場所に矢が突き刺さった。

「妹紅！あれほどついて来るなと言っただろ！」

「ご、ごめんなさい！」

どうする？このまま見守るか？それとも化け物扱いを受けてでも飛んで止めに入るか？

そう考えていたのがいけなかった。

グサッ
「グハッ！」
ドサッ
俺と妹紅が振り向くとそこには矢が刺さった藤原不比等が倒れていた・・・

第一ｓｉｘ話　～月人再び～（後書き）

第一ｓｉｘ話どうだったでしょうか？

え？クリスマスは何をしてたか？

２４日は某２５２５するサイトを巡回してました

２５日はスーパーマリオワールドというゲームでマリオを３０分のうち何回ボムヘイで倒せるか。という遊びをしてました。結果は５０マリオでした

感想、アドバイス、批判、訂正したほうがいい点などありましたらいつもどおりお待ちしております

第一？話　～暴走～（前書き）

どうも皆さんお久しぶりです。箪笥です。

とりあえず投稿が遅れたとき恒例の言い訳をしますと（おい
新年を迎えなかなかＰＣに触れない＋宿題が終わらないという難関がありました
そしていざ書き始めてみると納得がいくものができず書いては消して書いては消しての繰り返しをしていました。更新できないことにあせり「妥協」という形で今話を更新しました。
なのでいつもよりさらに駄文＋かなり短めです
楽しみにしてくださっている方、申し訳ありません。

それでもよろしいという方は第一？話どうぞ

？ＣＡＵＴＩＯＮ！？今話はいつもより多目の残酷表現が含まれます。注意してください　？ＣＡＵＴＩＯＮ！？

第一？話　～暴走～

ｓｉｄｅ　妹紅

「父上！」

私が師匠に助けられた直後、背後から何かが倒れたような音が聞こえた。
それを見た瞬間私は叫んでいた。

なぜ父上が倒れているのか？

なぜ父上に矢が刺さっているのか？

考えるよりも先に体が動いて師匠の腕を解き父上に駆け寄っていた。
嘘だ　父上が死ぬはずが無い。そうだ、そうに決まっている。きっと芝居をしているに違いない。

なのに・・・なんで・・・

「妹紅・・・俺が死んだらお前の師匠について行け・・・お前の世話ぐらいはしてくれるだろう・・・・」

死なないで・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　塵

なぜだ？なぜ月人は俺にかかわるとき俺の大切な人を殺す？

過去でもそうだ。月人が俺の友人を殺した。

いまでもそうだ。月人が俺の知り合いを殺そうとしている。

未来でもそうだ。月人がおれの一番・・・一番大切な人を殺す。

なぜ？ナゼ？何故？

だから殺す。殺されたから殺し返す。

そう結論を出したときには俺は行動をしていた。

シュッ

グサッ

ズシュッ

この場の何者にも捕らえられぬ速度で

この場の何者にも耐えられぬ一撃を

月人の一人の与える。

刀をその血が伝う

血、

血、

血、

血、

血？

そうだ血だ。

それがどうした？今までにも沢山見てきた血だ。

そう。

あかい

アカイ

赤い

紅い
紅イ

フフフフ・・・・ハハハハハッハ！
死を！
地獄より辛い死を！
血を！
何よりも紅い血を！
絶望を！
恐怖を！
こいつらに味あわせなければならない。
一気に殺しては絶望は生まれない。
一人ずつ・・・少しずつ・・・
再び刀を構えすぐ近くの月人を切る。
辺りに響く悲鳴。絶望と恐怖の音色！

しね

死ね

シネ

シンデシマエ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　紫

私は影でこのことをすべて見ている。

塵が月人を一人殺した。

そこからはまさにこの言葉が相応しいだろう

地獄絵図

いや、もしかしたらそれすらも生ぬるいかもしれない。

先ほどまで月人「だった」肉片が当たりに散らばり、血の水溜りを

つくって、上空から何かを切ったような音と生き物とは思えぬ悲鳴と同時に振ってくる血の雨
月人の数は着々と減っていき、肉片が少しずつ増えていく。

何故塵は月人にここまで怒っているのか？
確かに知り合いを一人殺された。それだけで怒る理由は要らないかもしれない。

でもここまでするとなると話が違ってくる

塵と月人には何かがあるのか？過去に、いや、もしかしたら一万年ほど前に未来へ行ったとき。
わからない。

ただ・・・一ついえるのは今の塵は正常じゃない。精神状態はもちろん、それ以外のなにかが塵を操っているような、そんな感じが私には見てわかった。
そう、自分の意思であって自分の意思ではない。矛盾した状態。
月人でなくても近づいたものすべてを殺すという覇気。

妖怪の本性ともいえぬ物。

まるで暴走しているような。

塵は時がきたら自分のことを話すと言っていた。

このことと関係があるのだろうか？

彼にはわからないことが多すぎる。

すべてを話してくれるときを待っているわ。塵。

side out

第一？話　～暴走～（後書き）

第一？話どうだったでしょうか？

ハイ、短いですね。
最近何かと短いのばっかり書いている気がします・・・

実は投稿できなかった間もちょくちょく評価のチェックなどをしていたりしてました。その際に目に留まったのはお気に入り登録数です。
じつは更新できていない間に２０件から３０件ほど増加しているのです。
それをみるたびに心が痛くて・・・

筆者がこんなんじゃダメですね。よし　がんばるぞ！

いつもどおり感想・アドバイス・批判・訂正したほうがいい点などありましたらおまちしております

第一ハチ話　～事件の行方と不老不死の薬～（前書き）

どうも箪笥です。

遅くなって申し訳ありません。今回は言い訳することもありません。

それでは第一ハチ話、どうぞ

第一 ハチ話　～事件の行方と不老不死の薬～

あの忌々しい事件から数日が過ぎた。
すべて丸く収まった。

はずも無くいろいろと大変だった。
先ず一つに兵士の死に方。この時代ではありえない死に方。そう、何かがすごい勢いで通って貫通したような傷跡がある。（藤原不比等は偶々弓矢であったが）
鉄砲は確か戦国時代に伝えられたものでありこの時代には無い。
よってこの兵士の死体を消さなければ歴史を変えかねないので消さなければならないのだ。

この点については竹取物語の富士のくだりを利用させてもらった。
帝が岩笠という人物の名前を使い不老不死の薬を兵士と共に燃やすように命じさせたように記憶を操作した。

記憶を操作するのは好ましいことではないのだがこの際仕方が無かった。
因みに不老不死の薬は俺が管理している。

因みに輝夜と永琳が逃亡したことに関してはすでに記憶修正がされていた。地上の人間に任務を失敗したところを記憶されるなど月人のプライドにかかわるのだろう。
ついでに月人の死体（にくへん）と弾丸などの科学力に関する物も回収されてい

た。

「妹紅、少し出かけてくる。留守番をしていてくれ」

「・・・わかりました」

あの事件以来妹紅は元気が無い。実の父が目の前で死んだのだ。当たり前だろう。

だが再び元気を取り戻すと信じている。俺がそうだったように・・・。

因みに出かけるといったが行くあてもあるわけではない。

本来原作では妹紅は帝が不老不死の薬を燃やすように命じて富士山に人を派遣したときに岩笠という人物から薬を盗み不老不死になるのだが帝からの命令はすでに出てしまっていることになっているので実行されない。つまり妹紅が原作どおりに不老不死になれないのだ。

ここまで俺の知っている歴史と変わってしまっているので妹紅が不老不死にならなくても余り関係が無いのだが一応は歴史どおりの展開にしたいのだ。

だからあえて俺は出かける際に薬を見やすい位置に出しておいた。

これでも妹紅が薬を飲まなかったらそのときはそのときだと考えている。

side　妹紅

師匠がどこかに出かけた。
私は少し考えていた。今回の出来事を、父の死を。
そしてこういう考えにたどり着いた。
「父はかぐや姫を愛して死んだのだ。そのかぐや姫さえ愛さなければ父は事件当日に屋敷には行かず死ななかった。かぐや姫さえ居なければ・・・。」
そして思いついたことは

復讐

そのためにはどうすれば良いか？ふと机を見ると机の上にふたをした小壷がおいてあった。
小壷には「不老不死」と書いてある。
たしかこれはかぐや姫がお爺さんとお婆さんに上げたがお爺さんとお婆さんは「どうして命が惜しかろうか。誰のために長生きしようか。何事も無駄になってしまった」
とかいってそのまま病に倒れ死んでしまったので師匠がもらってきたのだとか。

これを呑めば少しでも嫌がらせになるのだろうか？
それにかぐや姫はただの人ではないなら人よりも長生きするのだろうか？ならば不老不死になればどこに行ってでも復習することができる・・・？

どうせ呑む人が居ないなら・・・カぐや姫に復習できるなら・・・

私は小壷の蓋をとり、その中身を一気に――――

そして私は想像をぜっする苦しみと共に意識を手放した・・・

ｓｉｄｅ　塵

「ふむ・・・そろそろか？」

出かけてから数時間が経った。そろそろ戻っても平気だろう。そう思った俺は自宅へと足を動かした。

○

丁度家に着いたころ家からこそこそと誰かが出てくるのが見えた。

「そんなこそこそとしてどうした？妹紅」

ビクッと人影が動いた。そしてゆっくりこちらを向いて

「しっ、師匠！？」

「どうしたんだ？そんなあわてて。飯にするぞ」

「え？」

「どうした？」

「で、でも・・・」

「見た目が変わっている。と言いたいのか？俺にはお前は何も変わっていない様に見えるけどな」

「師匠・・・ありがとうございます・・・」

妹紅が小さく呟いた。

「あ、そうそう。飯食い終わったらここから引っ越すから」

あっさりと重要なことを言い放つ

「！？何でですか？」

驚いたように妹紅がたずねてくる

「そりゃあ俺にはお前が変わってないように見えても他のやつらから見たら怪しいだろうし、俺の都合もあるしな」

まあ都には最近少し顔を出しただけだから問題ないけどなと付け加える

「はぁ・・・私の理由はわかるとして師匠の都合って何なんですか？」

「ん？俺妖怪だからこれ以上体変化しないから村とか転々としてるんだよ。」

「どうなんですか・・・ってえええ！？」

妹紅が更に驚く

「というわけで、飯食うぞ。まあ、俺は食わなくても大丈夫だがな」

そんな感じで妹紅に俺の正体を明かし引っ越すことを妹紅に告げて一人分の昼飯の準備を始めた

ｓｉｄｅ　妹紅

驚いた。まさか師匠が妖怪だなんて。私もついさっき不老不死になったばかりだから余り人のことをいえないのだけどね。
後々考えてみれば師匠には人間としてはおかしい部分が少しあった。

一つに数年間一緒に居るのに身長や体格に変化が無かったこと。世間的に言うなら師匠は「青年」というレベルだと思う。

一つにいくら早く起きても師匠は私より早く起きて庭で刀の練習をしていること。おそらく一睡もしていないのだと思う。

他にもあげるときりが無くなりそうなのでこれ以上は言わないでおこう。
しかし・・・引っ越すのか。どこに引っ越すんだろう？遠いところに行くのだろうか？それともあまり遠く無い場所に行くのだろうか？どちらにせよ私は師匠の弟子。師匠が行くところになら付いて行きます。

そんなことを考えながら昼ご飯を食べていた。
因みに師匠は外で修行をしている。師匠曰く「どうせ正体を明かしたのだからいつもどおり人間を装わないで生活する」だそうだ
私は師匠に一つ近づいた気がしてすこし――――
うれしかった。

第一ハチ話　～事件の行方と不老不死の薬～（後書き）

第一ハチ話どうだったでしょうか？

なんだか最近文がうまくかけないんですよね・・・

ハッこれがスランプってやつか！？（ぇ

クオリティが悪くてもいいから早く更新するか、時間がかかってもいいから少しでもクオリティを良くして更新するかどっちがいいんですかねぇ・・・

まあ元々僕の小説にクオリティなんてあってないようなものですが。

というわけでアンケートを取ります。

1、時間がかかってもいいから少しでもクオリティを良くする

2、クオリティが下がってもいいから少しでも早く更新する

どちらかの番号を感想のほうに書いていただけるとうれしいです。

ついでにいつもどおり感想、訂正したほうがいい点、アドバイス、批判などありましたらお待ちしております

第一？話　～1年趣味～（前書き）

更新遅れて申し訳ありません

今日から春休みじゃぁ！

こういうときに遅れ多分の更新カバーするでぇ！

それでは第一？話どうぞ！

第一？話　～1年趣味～

ｓｉｄｅ　妹紅

師匠と旅を始めてどれぐらいたったのだろうか。もう覚えていない。
一応３０年ほどまでは覚えていたのだが不老不死のせいで体が変化しないのに年を数えることがバカらしくなってきてやめてしまった。
そもそも不老不死に年齢など無い。ただその時を過ごしていたというだけの記録が残るだけだから。

因みに師匠は今、自分の部屋にこもっている。なぜなら師匠は今「１年趣味」を行っている。
１年趣味って何？と思った人も多いだろう。
師匠はふと何かをやりたくなると自分の部屋にこもってしばらく出てこないのだ。
しかも睡眠、休憩、食事などの本来生きるために必要な行いの殆どをしていない。
その時間にして丁度１年。こもり始めてから秒以下の単位までぴったりあわせて丁度１年後に部屋から出てくる。なので私が「１年趣味」と命名した。
２４時間３６５日を一つのことについやすので当然出てくるときにはとてつもなく美味くなって出てくる。
その美味さを数値にしてみる。
並の人間を１とし人間の限界を１０としたとき師匠は５０となって出てくる。
料理に関しては普通の人間が師匠の本気の料理を食べたらもう師匠の料理以外は不味く感じるほどだろう。
そこまでうまくなれるのは師匠の能力、「ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」のおかげでもあるのだろうが。

まあ師匠は1年趣味を終えた出てきた後は飽きて滅多にその腕を披露しないのだが。

「って、師匠に暇なら日記でも書いてろって言われたけど書くことなんて殆どないよなぁ。仕事があるわけでもないし・・・」
そう私、妹紅はただいま絶賛暇中なのである。
しなきゃいけないことも無い。
することも無い。
話す相手もいない。
たまに依頼が来て簡単な依頼は受けているが大きな仕事は師匠がまだ早いといって受けさせてくれない。
ある年に師匠が1年趣味を始めてから出てくるまでの間を秒単位で測ったがいろいろな意味で精神が崩壊しかけた。
もうあんなことはしたくない。かといって師匠が出てくるまで後100日。まだまだ先である。

「仕方ない。今教えてもらってる分の妖術の復習でもするかー。」
妖術は本来人間が使えるものではないらしいが師匠が頭に手をかざしただけでなぜか使えるようになってしまった。
なんというかやはり師匠の能力はちーとである。

「えっと、大切なのはイメージすること。体の中に流れる妖力を感じてそれを手の上に炎として出す。・・・よし、できた」
これができるようになるまで1週間はかかった。最初のうちは妖力の使いすぎで何度か倒れることもあったが今はそんなことも無い。

「さらにこれに妖力を少しずつ加えて行く。これで少しずつ炎の玉が少しずつ大きくなっていく・・・うん、いい感じ」

その作業を終えた私は考える。少しぐらい無理をしてみても良いんじゃないかと。
無理とは今まで私は炎の玉を一度に一つしか出したことが無かったが、一度に複数出すということである。
「まあ・・・大丈夫でしょ」

side out

side 塵

ふー、終わった終わった。俺は今まで丁度1年間茶道を独学で勉強してきた。
久しぶりに外を見ようと扉を開けた瞬間鼻にわずかな灰のにおいが入ってきた。
何だ？と疑問に思いつつ歩を進めるとそこは・・・

大惨事になっていた。

「はぁ！？」

何が大惨事って家の3分の2が焼けている。そこに愛想笑いをして立っている人物が一人居た。
妹紅である。

「・・・さてはお前、一度に複数の火の玉出しただろ」

「ギクっ・・・」

「出したな！出したんだな！出しただろ！三段活用！」
と某幻想殺しの台詞を真似しながら妹紅に迫る

「す・・・すいません！」

「あれだけ言ったのに・・・というか家の中で炎出すか！？普通」
いったん間をあけてから
「家が燃えるのはぜんぜん構わないがこんな事して周りから怪しまれたらめんどくさいだろ？」

「うぅ・・・」
何も言い返せずといったところか。

「まあ俺が基礎しか教えてなかったのも悪かったが・・・よし、修行するか。俺でも同じことを1年間もやり続けると飽きるんでな」

（じゃあなんで1年間こもってるんだろう・・・？）
そんな妹紅が疑問を抱いてる間にも準備を進めて行く。

「ま、そろそろ大きな技とかもやろうと思うしそれなりの場所が必要だよな。というわけで行きましょうか」

「行くってどこへ・・・？ってええええええぇぇぇぇぇ」
質問に答える前に妹紅は俺が作った穴に落ちる。

「修行するなら広いほうがいいだろ？ってもう居ないか」
そういって自分の足元にも穴を作り落ちる。

さて妹紅がどれぐらい強くなるか楽しみだ

side out

第一？話　～1年趣味～（後書き）

前回アンケートを取った結
２のクオリティが下がってもいいから少しでも早く更新するのほう
が多かったので、
次回からはできるだけ早く更新できるようがんばりたいと思います
感想やアドバイス、批判などありましたらお待ちしております

第２０話　～弟子の修行～（前書き）

どうも箪笥です。
春休みとか言っておきながら結局一話（前話）しか更新できなかった・・・
くそう・・・妹紅にどうせ修行させるなら原作のものをって考えたのが運の尽き、
どうしてこうなった

妹紅のスペカってどんなのあったっけ
←
ＥＸ妹紅のスペカ２枚目までしかみれてねぇｗ
←
２、３週間ぐらいがんばる
←
某サイトで攻略動画見ればいいんじゃね？
←
というかスペカ自体を動画で見ればいいんじゃね？
←
あっ・・・

できるだけ早く更新するといったのにこんなに遅れるとは・・・
まあそのための「できるだけ」なんだｇピチューン

いきなり撃たれた！ひどい！

これからも「できるだけ」早く更新できるように頑張りたいと思います・・・

塵「信用性がねえな」

さらっとひどいことといわれた気がするが気にしない・・・

それでは２０話どうぞ！

ＰＳ、塵の性格がちょくちょく変わるのは仕様です

第２０話　～弟子の修行～

ヒュッ　ドン　ゴォォ　ドドドド　ドカァン

炎が飛び燃える音がするこの場所は自らが起こす音以外音がせず、何も無い真っ白な空間・・・つまり俺が妹紅の訓練のために作った空間である。

「ふはは！甘いぞ！その程度では俺に攻撃を当てることなどできんぞぉぉぉっ！」

「くっ！まだまだ！」

訓練すること約数年、妹紅はかなり強くなった。実力だけで言えばかなり強い妖怪とも渡り合える。

「はぁっ！」

妹紅が掛け声と共に大量の札を投げる。これは俺が妖怪用に作り出したお札で妖力に反応してダメージを当てるものだ。

「だいぶスピードが速くなったな。だが・・・まだ足りんぞォッ！」

刀を構え大量に迫ってくる札を切る。

「ならこれならどうだっ！」

そういうと妹紅は手に妖力を溜め、火の鳥に模した炎にして放つ。

その火の鳥が通ったところが燃えはじめた。俺はそれを横に跳びよける。

すると燃え広がった部分の炎の玉があらゆる方向に飛び始めた

「ふむ・・・面白い。だが・・・まだ足りぬ！」
足が地面につく前に浮遊術を使い炎の玉をよける。
「さあ！今度はこちらから行くぞ！」

○

そのしばらく戦い続けたがそろそろ妹紅が倒れそうなのでやめることにした。
とりあえず先にも言ったが妹紅は強くなった。
しかしだ。まだ妹紅は実践というものを殆どしていない。今のように俺と模擬戦のようなものはしているがこれは実践とはいえないだろう。
何故ならこの戦いは実践すると言うよりも、
練習でできても本番でできない。これは戦いだけでなく勉強やスポーツでも同じことが言える。
沢山勉強しても試験会場の雰囲気でうまくできなければそれまでだし、練習で強くても本番になると緊張して何もできなければ一方的にやられてしまう。

つまるところ妹紅と本気で戦って引き分けになる程度のやつと妹紅を戦わせたいのだ。
そこらへんの妖怪でも良いんだがそうすると手合わせというか殺し合いになり片方が死ぬ。
別に妹紅は不老不死なので死んでも問題ないが一応弟子なのでそう簡単に死なせたくないし本人も死にたくないだろう。
どうしたものか・・・いや・・・まてよ？原作では紫の式神で有名

なあの人はもう居るのか？
２０００年前後にはもう居ることは確定のはず。そこから狐が九尾になるまでの時間を逆算するととっくの昔に生まれているはずだ。だが問題はそこでは無い。問題なのは現時点で紫の式神になっているかどうかだ。まあ紫に尋ねてみるのが早い。

思い立ったらすぐ行動。え？どこに居るかわからない紫をどうやって呼ぶか？こうやってだよ！

サッとスキマを開いてあらかじめサーチしておいた場所に移動する。

・・・何というか・・・すごい・・・爆睡中です・・・

え？なに？幻想郷は放置ですかそうですか。まあなんとなく予想はできたけどねっ！
でもこれで紫が藍に仕事任せて寝てるフラグが立ったぞ！

・・・たぶんな

でもどうするか。このままここに居ても来るわけ
「貴様なにものだっ！」
その声と共に部屋に入ってきたのは特徴的なＺＵＮ帽、モフモフできそうな尻尾に金髪。
どう見ても藍さんです本当に（ｒｙ
どういうことなんだよ・・・おかしいだろ！タイミング的な意味で

どう反応すべきか・・・などと考えていると

「ハッ、まさか紫さまの命を！？」

とんだ勘違いです。でも本気で妹紅と戦ってもらうにはこれがいいチャンスかもしれない。

というわけでこの会話の流れに乗ることにした

「フフフ、その通り！そこで寝ている妖怪の命を狙うものとはこの異塵　界（いじんかい）とは俺のことよ！」

うわー・・・正直恥ずかしい。能力無かったら顔真っ赤になってすぐばれていただろう。

「ならば消すまで！」

シュッと言う音と共に突撃してくる。俺はそれを避けて提案する

「しかしこの狭いところで戦うのはごめんだ。お前も流れ弾をあいつに当てたかねぇだろう？」

「・・・仕方ない。紫様を護るためにはその条件を呑んだほうが得策のようだな」

「場所は用意してある。なに、お前は立っているだけでいい

その言葉と共に二つの影がこの家から消えた・・・

○

俺達がやってきたところは広い庭・・・といってもさっき俺と妹紅が戦ってた場所で俺の家なんだが。

「では早速はじめるとするか」

「まあまて。そんなにあせるな。それにお前と戦うのは俺じゃない」

「何？」

「お前と戦うのは俺の弟子だ。来い」

俺はスキマ（のようなもの）を出して妹紅を呼ぶ

「何のようですか？師匠？って誰ですかあのひと。というかここに居ると殺気のようなものをかんじるんですけが！？」

何故か呼び出されたと思ったら呼び出された場所に一触即発の雰囲気をかもし出して居る妖怪がいるという状況に驚いている妹紅

残念だが君にはこの状況での拒否権が無いんだ

「修行兼命令だ。あいつと戦え。手をぬこうなんて考えるなよ？死ぬぞ」

笑顔で妹紅にそう伝える

「修行で死ぬかもしれないってどういうことですか！？」

妹紅が文句を言ってくる

「ん、そのままの意味だ。とりあえずもうはじめて良いぞ」

「戦う本人が状況を理解してないようだが・・・行かせてもらうぞ！」

藍が妹紅にすごい勢いで接近する。

「あぶなっ！」

ぎりぎりで妹紅が体をそらして攻撃を避ける。

「よくわからないけど戦うしかないみたいだね。」

妹紅が力を集め・・・

修行という名の戦いが今、幕を開けた

第２０話　～弟子の修行～（後書き）

第２０話どうだったでしょうか？
とりあえずこの亀更新を何とかしなければ・・・

いつもどおり感想やアドバイス、批判や誤字脱字等ありましたらお待ちしております

ＰＳ，ニコ生もたまにやってます暇な方は探してみては？
（ユーザー名はあちらでも同じです）
ただしあちらでこちらの話は禁止します。だって恥ずかしいじゃない

ＰＳ，ｐｉｘｉｖのほうも気まぐれで書いて気まぐれに更新してます
（ユーザー名は以下略）

第２一話　～式の獣と地上の蓬莱人～（前書き）

どうも箪笥です。

藍の口調が全然あってるかわからん。でも自分の中ではこんな感じ。

絵がうまく書けるようになりたい。

画力があれば異界　塵の立ち絵を描きたいんだが生憎そんな才能が無い。

それでは第２一話　どうぞ

第２一話　～式の獣と地上の蓬莱人～

此処はとある家の大きな庭。現在そこでは２名が修行という名の死闘が繰り広げられている。

シュッシュッシュッ、ササササッ

二人のうちの一人がお札投げもう片方がクナイのような形をした物を放っている。

お札を投げているほうが「藤原　妹紅」

クナイのようなものを投げているほうが「八雲　藍」

「「はあああああっ！」」

掛け声と共に弾幕が発射されお互いの玉が相殺していく。

しばらくはそんな持久戦が続いていた。

「くっ・・・なかなかやるな！だが私も紫様のために負けるわけには行かないのだッ！」

先に大技を仕掛けたのは藍のほうだった。

大きな玉が発射されたと思ったら妹紅の少し前で爆発し、大量の小さな玉となった

原作では式神「仙狐思念」という弾幕だ

これはいきなり爆発させ大量の小型弾幕を作って相手の冷静さを奪う弾幕だ。

だがよく見れば爆発した後の小型弾幕の方向は一定でかつ自分自体

を狙う玉は多くはない。
冷静になってよく見れば細かい動きだけで避けれる。
寧ろ大きく動くと自分を狙っていない玉に当たるという仕組みだ。

「くっ・・・」
妹紅もそれに気がついたのか手に力を溜めながら自分を狙ってくる玉だけを避ける。

「こっちもいくよ！」
妹紅が溜めた力を放ちながら札をまく

原作では藤原「滅罪寺院傷」という弾幕だ

原作では自分に炎の羽を出現させてその辺りに使い魔を召喚し、一定距離進むとターンして帰ってくる札を上下にばら撒かせる弾幕だ。
気合で避けようとすると前から来る札と後ろから来る札に注意しなければならず集中しないとたちまち被弾してしまう。
実は使い魔に密着すると比較的安全だったりするのだがそれは原作の話。
実際の戦いでは使い魔の玉があたらなくても妹紅本人が攻撃できるので意味が無い。

それを見た藍は攻撃を中断し避けに専念する。
最初は後ろから来る札に苦戦していたがすぐ体制を建て直し難なく避ける。

「なかなかやるね・・・」

「そっちこそやるじゃないか。だが・・・こっちも手短に終わらせなければならない」

藍はいったん言葉を言ってから
「どうだ？お互いに次の一撃に全力をかけて力勝負と行こうじゃないか」

「わかった。いいよ」
妹紅がそれを了承するとお互いに距離をとる。そして力を溜めることに集中する。

辺りにものすごい威圧感が流れる。あらかじめ認識妨害の結界等を張っておいてよかった。

「さて・・・」
「いくよ！」

「「ハアアアアアアアアアッ」」
ゴオオオオッという音と共に両者から今までのような弾幕ではなくビームのようなものが発射される。

そして2つのビームがぶつかり合うと更に大きな音を立ててお互いを飲み込もうとする。
『今のところは』両者互角といったところか、ぶつかりあってから進展が無い。

しかし

均等を保っていたビームが徐々に妹紅の方へと移動して行く。
「くっ！」
何故この妹紅が押され始めたのか？それは簡単なことで、妹紅の妖力が切れてきたのである。
車がガソリンが無いと動かないように
ＰＣが電気が無いと動かないように
中身が入っていないペットボトルの中身が飲めないように
行動を起こすにはそれに必要なものがある。
ではそれが行動を起こしている最中になくなったら？
ガソリンや電気が途中で無くなれば車やＰＣは途中でも止まってしまうし、
中身のあるペットボトルを飲んでいても中身が無くなってしまえばそれ以上は飲めないのだ。
だから妖力が無くなり始めた妹紅が発射しているビームの威力が下がり飲み込まれ始めているのだ。
それだけではない。藍が徐々に力を更に開放し始めているのだ。
つまり最初の均等なぶつかり合いは藍にとって様子見だったらしい。
まあ妹紅が藍に負けるのは予想済みだ。そもそも二人では生きている年数と戦ってきた数が違う。
妹紅は修行を始めて数十年、実戦は殆ど無い。

対して藍は自分の尻尾が九尾になるまでの時を生きて、しかもその間に実戦も沢山経験しているだろう。

などと考えているとビームのようなものは妹紅のすぐそばにまで迫っていた

ただ自分の弟子が怪我して終わるのもなんなので

乱入しようか。といっても修行という名の戦いを止めるだけだが。

妹紅がビームに飲み込まれそうになった瞬間に近づき、

「妖力を・・・切るうううぅぅっ！」

剣技「妖斬」

文字道理妖力の塊が真っ二つに切れてそのまま俺と妹紅の横を通りすぎて行く

「さて、妹紅、ここまでだ。休んでろ」

少し唖然としていた妹紅は黙ってうなずく。

「お前・・・どういうつもりだ？」

「どういうつもりも何もお前と妹紅を実戦レベルで戦ってもらうのが目的だったんだが」

「何故だっ！？」

「んー？そうだな・・・異界　塵って名前ぐらいは紫から聞いてるだろ？

「・・・証拠は？」

あの反応だと紫から俺のことはいろいろ聞いているらしい。

「証拠なら・・・あれだな」

パチンッ　と俺が指を弾くと藍の目の前にある紙が現れる。

「それを見れば俺が異界　塵ってことがわかるだろう。ああそうそう。異塵　界ってのは偽名だから」

因みに藍に渡した紙は異界　塵証明書。名前だけ聞くとなんだそりゃと思うだろう。

これは何かというと、その名の通り俺が異界　塵であることを証明する紙で、紫が書いたものだ。

なんでも妖怪とめんどくさいことになったらこれ見せ付ければ大抵収まるとのこと。

あの紙に何が書いてあるのかはよく知らないが妖怪にあの紙を見せると手を引いてくれる。

「・・・わかった信じよう。この紙を持っているのは紫様と友人の塵様しか居ないからな」

「信じてくれるならめんどくさいことにならずに済むな」

「でもなぜ私と彼女を？」

「あいつは俺の弟子で「らあああああん？こんなところで何をやっているの？」おい紫。台詞に台詞を重ねるな」

「あら？ごめんなさいね？」

（ぜってぇ謝る気ねぇ・・・）

まあいつもどおりでそれはそれでよいのだが。

「紫様！？」

そして突然の状況に驚く藍。

「そうそう。藍？夕飯はどうしたの？お願いしたわよね？」

「あ」

あー　勝負が白熱しててたから夕日が沈むのに気がつかなかった。

まあ、なんと言うか・・・藍、ドンマイ！

「すいません！今から作ってきます！」

「今からじゃ遅いのよ！」

「まあまあ、こいつをせめてやんな。元々ここに呼び出したのは俺なんだし、お詫びに夕飯なんてぱぱっとつくってやんよ」

「・・・まあ良いわ。ただしすぐ作りなさいよ？」

「はいはい」

俺がそういった瞬間、紫たちにはこの場にいきなり机といすが出て

きて【4人分】の夕飯が準備されていたように見えただろう。

「・・・あら？ずいぶんと早いじゃない」

「だから言ったろ？お詫びだって」

こうして今日も一日が流れて行く。

それが災厄へのカウントダウンとも知らずに――――

第２一話　～式の獣と地上の蓬莱人～（後書き）

第２一話どうだったでしょうか？

もう少し早く更新できるようになりたいなぁとか思いつつ書いてます。

また、弾幕の解説は実際にその弾幕を見たりよけてみたりして自分が思ったことを書いていますので、本当に本文の解釈で合っているかはわかりませんので注意してください

あと、もう一つ小説の設定を思いついたのですがそれを書くべきか暖めておくべきか・・・

いつもどおり感想、批判、アドバイス、誤字脱字等ありましたらお待ちしております

第２２話　～別れ～（前書き）

どうも箪笥です。今回は比較的早く更新できたかなと思います
（ただし繋ぎ件導入部のような部分なので短め）

時間がかなり飛びますがコレもフラグだったりゲフンゲフン

では第２２話どうぞー

第２２話　～別れ～

「ふぅ・・・ここに戻ってくるのも久しぶりだな・・・ん？」

「どうしたんですか師匠？・・・ってあれ？」

どうなっている？空間移動の穴を出す位置は前回とまったく変わっていないはずだ。
なのに何故この場所は数百年も立った様に姿形が変わっている？
いや、実際に数百年立っているのだ。時間は止めておいたはずなのに・・・。

実を言うと妹紅と藍を戦わせた後俺と妹紅は俺が作った【外】とは一切干渉せず、更には時間すら進まないという空間で修行をしていて戻ってきたのだ。
が、なぜか進んでいるはずの無い時が進んでいるのだ。

「何故だ・・・？俺が能力の使用に失敗したとでも言うのか・・・？」
いやそんなことは無いはず。空間を作った時点では完璧だった。【外】の世界からは干渉不可だから【外】のものがどうこうもできないはずなのだ。

「まあいい・・・それより妹紅。俺がこの修行を始める前に言ったことを覚えているな？」
妹紅にたずねる。

「…はい」

「そんなくらい顔をするな。お前は不老不死、俺は実質不老不死なんだからまたいつか会えるさ。」
そう。俺が妹紅に言った言葉は・・・
修行を始める前まで時をさかのぼるとしよう。

○

「妹紅、お前に話さなければならないことがある」
「？　何ですか？師匠」
「今回の修行がお前との最後の修行だ」
「え・・・それどういう意味ですか？」
「そのままの意味だ。この修行が終わったら師匠と弟子という立場をなくして別れるんだ」
「ちょっと待ってください！急すぎですよ！」
「俺はいろいろなことをお前に教えてきた。もともと俺がお前に教えるのは一人前になるまでというお前の親父との約束だったから長いくらいだ」

「で、でも・・・」

「いいか妹紅。親というものはどういう意図があろうと大抵子に厳しくするものだ」

「え？どういう意味ですか？」

「人の話は最後まで聞け。お前はお前がまだ歳も行っていないうちに親父が死んじまった。それでも俺はお前の親父との約束を果たそうと思った」

「約束？」

「お前を一人前にすると同時にお前の親父の変わりに父親のような存在になってくれってな」

「！？　お父様がそんなことを・・・？」

「あいつにはあいつの考えがあったんだろう。俺にそういったということは何かしろ身の危険を感じ取っていたんだろう。」
あの事件じゃなくても生きている場所が生きている場所だからな、と付け加える。

「・・・」

「だから俺はお前に厳しくしてきた。それが約束だから。でもお前は十分妖怪とかと戦っていける。だからこの修行を最後にして旅立ってほしい。世界を見てきてほしい。これがあいつの代わりとして父親の役割をやってきた俺の最後の願いだ」

「…分かりました」

「まあ今からやる修行は何百年もかかるんだがな」

「えっ・・・？」

○

とまあこんな感じだ。

「最後の師弟としての会話なんだ、出発する場所を指定してくれればそこまで運ぶぞ？」

「いや、ここで良いです。師匠と長年行動して伊達に生きる方法見つけてませんから」

「そうか・・・ならここでお別れだ。妹紅」

「そうですね・・・師匠。今までありがとうございました。そしてさようなら・・・」

こうして俺達は文字通り別の道を歩き始めた。行き着く先は同じだろうが。

しかし、それにしても能力がうまく使えなかったってことは思ったより早く【あれ】が進んできているのかもしれない。

何か対策があればいいのだが――

第２２話　～別れ～（後書き）

第２２話どうだったでしょうか？
久しぶりの１週間以内更新ということで短めでした。
（この速さでいつもぐらいの量で更新できればいいのですが…
時間を吹っ飛ばしたのはめんどくさかったからじゃないんだからね！フラグのためなんだからね！
いつも通り感想批判、アドバイスや誤字脱字等ありましたらお待ちしております

第2参話　～桜の木は～（前書き）

どうも、箪笥です。
できるだけ早く更新できるようにがんばってます。

今回は書いてて台詞が多いかなーと思ったり。
相変わらずクオリティなんてものはかなぐり捨ててますがよろしくお願いします

それでは第2参話　どうぞ

第2参話　～桜の木は～

妹紅と別れた俺はとりあえずどれくらい時間が経ってしまったのかを調べようとした。
が、その瞬間に紫が来たのでやめた。わざわざ調べるより聞いたほうが早いと思ったからだ。

「久しぶりだな。紫」

「久しぶりだな。じゃ無いわよ。今までなんだかんだで貴方の場所を探知できるようにしててくれたから急用があっても連絡できたのに何百年も探知できなくてて困ってたのよ」

「すまないな。こっちにも理由があるんだ」

「・・・まあ良いわ。今までの急用はなんだかんだで一人でも何とかなったから。でも今回はそうも行きそうに無いのよ」

「？　お前がどうやってもどうにもならないのは珍しいんじゃないか？何なんだ？」
本当は今はいつごろなのか聞きたかったが結構深刻そうな話なのでやめた。

「実は・・・あってほしい人が居るの」

○

「こりゃまた人間の屋敷にしてはでかいところだなぁ・・・」

「あってほしい人というのはここの主の娘なの」
紫があってほしいといったら・・・幽々子か？原作の通りなら二人は仲がいいはずだ。

「ふーん・・・で、そこに隠れてんのは誰だ？監視されるのは好きじゃないんだ」

「・・・私を見つけるとは、なかなかの御仁のようだ。監視していたことはお詫び申し上げる。ただ、門をくぐって居ない来客が二人居るとききまして・・・な」
そういいながら木の影から出てきたのは緑の和服を着て、腰に二つの刀をさげた老人だった。

「あら、ごめんなさいね？妖忌。こちらも急いでいたので。紹介するわ、この方が異界　塵よ」

「成程、貴方が塵殿か。紫様からは話は聞いております。私は魂魄妖忌と申します。」
・・・その口ぶりだと紫は俺のことをいろいろと話しているようだ。面倒なことまで話してないと良いが。

「妖忌さんね。さっき紫が説明したとおり俺の名前は異界　塵だ。

よろしく。」
自己紹介されたのに何も返さないのは失礼なので改めて自己紹介する。

「こちらこそよろしくお願いします。ところで塵殿は剣術の腕が腕が立つそうで・・・」
ふーん・・・なるほどね・・・いろいろ話を聞いているようだ・・・

「ふっ・・・やめてくれ。まあ今は駄目だな。紫が人を待たせてるみたいだし」
とりあえず適当に言い訳をしておく。

「そうですか・・・。それでは幽々子様をよろしくお願いします」
ここでやっと出てきた要人の名前。まあ紫の友人と魂魄の名の者が居る辺りで大体予想はついていたがこれで確信が出た。

「わかってるわよ」
一気に紫の表情が真剣な顔に変わった。

（これから起きることも大体の予想はつくがここから先はある程度流れに身を任せたほうがよさそうだな。）
そう結論付けた俺は黙って紫の後ろを付いていった。

「あら・・・？紫じゃない・・・いつもより随分と早いのね。それと・・・後ろの貴方は誰かしら？」

この屋敷の庭を進み奥のほうまで進むとそこには1本の桜の木と一人の少女が立っていた。
おそらく・・・あの木が【西行妖】で少女が【西行寺幽々子】だろう。

「あら幽々子？いつもより早く来ちゃいけないかしら？」
そういった後、紫はフフッと笑い
「冗談よ。今日は紹介したい人が居てね」

「俺の名前は異界　塵。まあ紫から話は大体聞いてるだろ。よろしく。えーっと」

「私のことは幽々子で良いわ。その代わり私も塵と呼ばせてもらうわ。よろしく」

「分かった。別にかまわん。」

「まっ、紹介終わったらいつもどおり話すぐらいしかすること無いんだけどね」

「いいじゃない・・・話すのも楽しいわよ？」

「幽々子が良いならいいのだけど」

それから何時間話をしていただろう。よくこんなに話して話題が尽きないなと思いつつ聞いていたら、内容が珍プレー黒歴史その他い

ろいろだったので内容は割合させていただく。

「あら、もうこんな時間じゃない。そろそろ帰らないと藍が怒りそうだわ。」
仕事まかせっきりだし　っと紫が呟く

「・・・お前また藍に仕事まかせっきりなのか。知らんぞ？そのうち愛想つかせてどこか行っても」

「良いの良いの。塵はどうするの？」

「俺も明日のことがあるからそろそろ帰るかな」

「そう・・・みんなやることがあるなら仕方ないわね・・・また来てね」

「ごめんね幽々子。また来るわ」

「今日あったばっかりだったが楽しかったぞ。またな」

「ええ・・・また・・・」

そうして俺達は屋敷から出た。

「・・・気がついた？」
帰り道、紫がたずねる。

「あんだけ【死】の力振りまいてんだから気がつかないはずが無いだろ」
尤も、俺を殺すにはあの程度では駄目だがな。と付け加える。

紫が尋ねてきたのはおそらく西行妖・・・いや幽々子と西行妖両方か。
幽々子と西行妖は両方とも近づくものを徐々に殺す力を持っている。西行妖にいたっては枯れている状態であれほどの力をまいているのだ。満開にしたら普通の人間などはひとたまりも無いだろう。

故に
「あの屋敷で生きてるのは幽々子本人と魂魄家・・・元々か後からなったのかは知らんが妖忌も半分は死んでいるだろう。この場合半人半霊といえばいいか？」

「・・・ええそうよ。それに幽々子自身も今ではああだけど少し前までは目を話したらすぐにでも自分の首を絞めようとしていたぐらいなのよ・・・」

「で、どうするつもりだ？このまま現状維持ってこともしないだろ？」

「ええ。封印するわ。あの桜を次の満開の時にね」

「ふーん・・・。まあ俺の仕事は封印の護衛ってことか。あれほどまでに霊気やら妖気やらを吸った木が何も抵抗せずに封印されるとも限らないしな」

「分かってるじゃない。これが朝言った貴方にしかできないことよ。」

「確かに、降り注ぐ死を気にせず妖怪桜の攻撃から封印役を長時間護るなんて俺ぐらいにしかできねぇな・・・」

「時が来るまでまだ時間があるわ。幽々子にはそれまで辛抱してもらうわ」

「ま、がんばれよ。俺はそろそろ行くから」

「ええ、分かったわ。今日はありがとう」

「またな」

「間に合うといいな」

「え・・・？」

第2参話　～桜の木は～（後書き）

第2参話どうだったでしょうか？
ここは前々から書こうと思っていた場面でしたが難しいですね・・・
そういえばバトンでも書こうかなと思ってたりでも創っても回す人がいな（ｒｙ
だから回ってこないかなーなんて考えてますがそもそも交流がある人なんてほとんど居ないので（ｒｙ
つまり何がいいたいかと言うと人間関係は大切に（ｒｙ
いつも通り感想批判、アドバイスや誤字脱字等ありましたらお待ちしております

第２?話　～墨染めの桜、西行妖～（前書き）

どうも箪笥です。
今回は今までに比べるとだいぶ長いです。
なので読みにくいかも。でも反省はしていないし、こうかいも（ｒｙ
そんな感じです。

だが長くてもいつもの低クオリティに変わりはありません御了承を。

それでは第２?話　どうぞ

第2?話　～墨染めの桜、西行妖～

俺は紫と幽々子のところへ向かっている。
今日は例の桜、西行妖が満開になる日なのだ。
俺は数週間ぶり、紫は数日振りだそうだ。
紫は今日に向けて封印の術式を調整していたらしい。

「・・・封印できると思うか？」

「勿論。封印してみせるわ」

「そうか・・・」

「本当は貴方みたいな人がバッサリとあの妖怪桜を切ってくれたほうが早いんだけど」

「馬鹿か。あんな【死】の力を溜め込んだ木をきったらどうなるかぐらいは分かるだろう」
花が全部散った状態でも通りかかる人を死に導く程の力を持った桜を切ったりなんかしたらいっせいに【死】の力が漏れ出す。
人間の首の動脈を切ると大量の血がふきだすように、あの桜を切ると大量の死が漏れ出すのだ。
簡単に言ってしまえばあの桜の幹は人間の首で中をめぐる死の力が人の血だということだ。
そんな力が漏れ出したらどうなるかなんか考えたくも無い。

「分かっているわよ。だからこうして封印の術式を調整してきたのよ」
そうか。と返して再び歩き続ける。

○

今日は歩いてきたので門から入る。

「・・・？妖忌が居ない？」

「おかしいわね？買い物にでも行ってるのかしら？」

「この時期に見張りの妖忌がここを離れるのはおかしいと思うんだが・・・まあいい。入らせてもらおう」

西行妖が満開になっているからか前に進むたびに【死】の香りが強くなっている。

少し進むと人が壁に寄りかかって倒れているのが見えた。

「妖忌！」

「・・・紫様と塵殿・・・か」

「どうした！？何があった？」

「私のことはいい・・・。早く幽々子様を・・・っ！」

「妖忌・・・！・・・紫！先に行ってろ！」

「でもっ！」

「いいから！お前は幽々子を助けるんだろ！？妖忌のことは俺に任せて行け！」

「・・・わかったわ」

ゆかりはは妖忌に言われたとおり急いで幽々子の場所へ向かった。
おそらく幽々子の居る場所は西行妖の咲いている場所だ。

side　紫

建物の角を曲がるとそこには1本の桜と一人の少女が立っていた。
その少女の手には包丁程度の大きさのナイフが握られていた。

「あら・・・幽々子じゃない・・・」

「お願い幽々子。馬鹿な真似はしないで！」
そういいながら紫が幽々子に近づく。

「近づかないで！」

「なんで！」

「紫には分かるでしょう？この桜の危なさを！かつて父と共に一番大切にしていたこの桜の力を！」

「だからって貴方が死ぬことは無いでしょう！」

「この桜は私と関係しているのよ。この桜のせいで私は新しい力を手に入れてしまったし、この桜が妖怪桜になったのも父がこの桜の下で死んでしまってその精気を吸ったからなのよ？父と血のつながっている私と関係しててもおかしくない！」

それにと一言おいてから

「私はもういやなの。自分の力で人を死なせてしまうことが嫌なの！」

「幽々子・・・」

「私は・・・私は！」

そういうと幽々子は手に持っていたナイフを首元に持って行き――

――

「！　駄目ッ！

走って止めようとしたが気がついた時にはもう遅かった。

シュッ

という音と共に幽々子は自らの首の動脈を切断し

ドサッ

という音と共に幽々子は血を流しながら倒れた。

「幽々子ッ！」

急いで幽々子に駆け寄って名前を何度も呼ぶがピクリとも動かない。

「幽々子ぉ・・・」

何とかしたいが私の能力でも命の境界を操ることはできない。

どうしてこうなってしまったのだろうか？こうならないためにこの桜を封印しようと準備をして来たのではないのか？

そんな考えばかりが浮かんでしまって本当に何をするべきなのかが全然頭に浮かんでこない。

本当にどうして・・・

side out

side 塵

俺は妖忌の手当てを終えると急いで紫と幽々子の元へ向かった。

そこには、血を流しながら倒れている幽々子と泣きながら幽々子の名前を呼んでいる紫が居た。

「幽々子・・・・・・紫、始めるぞ」

「でも・・・ッ！」

「いや。やるんだ。今お前が幽々子のためにできることは何だ？ずっとそばで泣くことか？悔やむことか？違うだろ！？元々の目的は何だった！幽々子のためにあの桜を封印することだろう！」

今の紫には少しきついかもしれない。でもそうでなければ駄目なのだ。俺の能力を使っても人を生き返らせることなんてできない。だからこそ今できないことをしようとするんじゃなくて今何をするのか考えて行動するのが幽々子のためになるのだ。

「・・・ええ。分かったわ。ごめんね・・・幽々子」

紫は西行妖から少し離れ、術式を組み立て始める。

西行妖はそれを察知したのか【目に見えない何か】を集め始めた。

紫が術式を組み立て終わり術を展開しようとしたその瞬間だった。

西行妖が集めていた何かを紫に放ったのだ。

「くっ！」

俺は紫と西行妖の間に割りこんで刀でそれを受け止める。
「確かにさすがの紫でもこんなもんぶちまけられたら不味いだろうな。だがな、俺を殺すんだったらこんなんだったらぜんぜん足りないぜ！紫！西行妖のことは任せろ！攻撃は全部防ぐ。お前は術に集中しろ！」
「分かったわ！」
そうこうしているうちに西行妖が先ほどのとは比べ物にならないほどの規模の死の力を放ってきた。
「ったくどうしたらただの桜なんかにこんな力が集まるんだっ！？」
西行妖は更に3発目、4発目を放ってくる。しかも確実に量が大きくなっている。
「くっ！」
ただ単に攻撃を防ぐだけなら簡単なのだが誰かを護りながら、といくと勝手が違ってくる。
数発同時に放たれたら能力を使わないとやばいかも知れない。だが今は能力を大きく使いたくないのだ。
これは時を止めるのを失敗してから調べたんだがどうも能力を大きく使おうとすると失敗しやすい状態らしい。
理由は分からないがこんな時に失敗などしてしまったら大変なことになる。だから能力はあまり使いたくないのだ。

それから数分は同じことを続けていた。今のところ能力は使わずにすべての攻撃を防げている。

そんな風に考えていると西行妖が一際大きく死の力を集め始めた。

そして

ゴオォォォという音がしたと思ったら西行妖から今までのとは考えられないような量の攻撃が迫っていた。

不味い。量でさえさっきまでの比じゃないのにこの量は不味い！

頼む！能力！しっかり発動しろよ！

「ウオオオオオオオオオオオッ！」

雄たけびを上げると俺と紫の周りに大きな防御結界が現れる。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオッ

死の力の集まりが結界に当たるたびに結界が揺れる。

このままでは不味いと思いとっさに妖力を流し込む。

が、

喉の奥から鉄のような味がしたと思ったその時、

俺の口から赤い液体が飛び出した。

「がはっ！？」

「塵！」

これは・・・恐らく死の力のせいではない。能力の使用の副作用だ。
これは俺が思ったよりやばいことになっている様だ。

西行妖はそれを見逃さない。死の力を太い木の枝のように集めて鞭のように何度も結界に攻撃を仕掛けてくる。
そのたびに俺の息が荒くなっていくのがわかる。

「へへっ・・・面白いぜ！俺がぶっ倒れるのが先か！紫がてめぇを封印するのが先か！」
言葉を発するたびに口から赤い液体が飛び出す。

「塵！無茶はしないで！」
紫から注意される。

「へっ！今無茶しないでいつ無茶をする！てめぇは俺のことなんざ気にすることはねぇ！」

「・・・わかったわ・・・でも・・・このままじゃ・・・」

「どうした。術式に問題でもあったのか？」

「いえ、術式は完璧なの。でも私が予想していたより力の大きさが超えていてなにか鍵になるものが無いと封印できないわ！」

「くっ！そういうことか！」
でも鍵っていったって何がある？いや待てよ・・・鍵ってもしかし

て！

「・・・鍵に幽々子を使うわ。この桜が妖怪桜になったのは幽々子の父がこの木の下で死んでその精気を吸ったからと幽々子は言っていたわ！その父と血の繋がりがある幽々子なら鍵としては十分よ！」

「わかった。だが紫。お前はそれで良いのか？鍵に使ったらどうなるかはわからんのだろ？」

「・・・ええいいわ。幽々子は言っていたわ。『私が困った時は紫に相談する。だから紫がが困った時は私を頼って』ってね」

「だったら急げ！この結界ももうそう長くは持たない！」

「わかったわ！・・・幽々子・・・あなたの体、使わせてもらうわ。」

そんな話を聞いていたからなのか西行妖が攻撃をやめ再び力を集め始めた。

恐らくもうすぐ封印されることを悟って次の一撃で決めるつもりなんだろう。

「いいぜ・・・てめぇの全力の一撃をうけてめてやるぜ！」

西行妖は恐らく自分に残ってるすべての力を集めたのだろう。今までの数十倍のおおきさである。

そしてその死の力が今放たれた。

ドゴオオオオオオオオッ

攻撃が俺の結界と激突し大きな音を出す。

結界が大きく揺れる。

両方とも消滅することなく刀と刀の鍔迫り合いのようにぶつかり合っている。

「負けてたまるかよおおおおおお！」

ピキッ

結界にヒビが入る。

だがそんなことは関係ない。結界が崩壊してもよい。この攻撃を受け止めれば俺達の勝ちだ。

ピキピキピキッ

ヒビは徐々に大きくなってゆく。

そして大きな爆発が起こった。

そう、死の力が爆発したのだ。

それと同時に結界が割れる。

それはまるで死の力という太陽に照らされた結界というステンドグラスが割れたように綺麗だった。

「いくわよ！」

紫から展開された魔方陣から大きな光が発射される。

その光は幽々子に当たり、更に幽々子から西行妖へと発射されて――

――

先ほどまで満開だった桜から花が散り始めた。

そう、封印に成功したのだ。

そして散った花はどこか寂しげに空を舞っていた。

○

「おわった・・・か。お前が始めてだぜ・・・この結界を割ったのはな・・・紫・・・いるんだろ？出て来いよ」

「あら、気がついていたの・・・」

「・・・封印が成功したから今回のことをとやかく言うことは無い・・・だがこれだけは聞かせてくれ」

「なにかしら？」

「お前・・・わざと【鍵】を使わないといけないように封印の術式を調整しただろ」

「！・・・なんで分かったのかしら？」

「これでもお前とは長い付き合いだ。それぐらい分かるさ。理由としては・・・そうだな、お前もうすうす気がついていたんだろう？幽々子の自殺を自分には止められないことを」

「ええ・・・そうよ。だからせめてもの償いに幽々子にも封印を手伝ってもらったの・・・まあ幽々子がどう思ってるかはわからないけどね・・・」

「でも・・・その判断のおかげでお前が一番望んだ結果になったん

じゃないか？多少の問題はあるようだが」

「？どういう意味かしら」

「こういう意味だ」

「あら？あなたたちは誰かしら？」

紫が振り返るとそこには幽々子が立っていた。

「ゆ・・・幽々子！」

「なんで私を知っているのかしら？私眠っていたみたいなのだけれどもそれより前のことを思い出せないの・・・」

「記憶を失っているようだけど、これでまたやり直せるじゃねぇか。記憶ってのは覚えておかないほうがいいこともあるんだ。思い出してほしいことは今からゆっくり教えていけば良いさ」

「・・・ええ！」

こうして幽々子は生き返った。ただ本人は殆どのことを覚えていないようでしばらくは紫と妖忌が側につくことになった。

○

「・・・」
おれは幽々子たちと少し話してからばれないように外に出てきた。
紫と幽々子のことは大丈夫だろう。なんとかなる。
俺にもしなくてはいけないことがある。しばらくあえなくなるだろう。

「いってしまうのね・・・」
振り向くとそこにはゆかりが居た。

「驚いた。ばれないようにきたつもりだったがな。」

「貴方とは長い付き合いなのよ？それぐらい分かるわ。」

「そうか・・・そうだったな・・・」

「やっぱり、しばらく会えなくなるのかしら？」

「ああ・・・数百年ってところかな。眠りにつくことにする。」

「わかったわ・・・気をつけて・・・」

「そうだな・・・また会うその日まで・・・」
俺は足元に穴を作り落ちてゆく。

そう、そこは何も無い空間。

暴走しそうになっている能力を治める空間

永い眠りにつくための空間――――

第2?話　～墨染めの桜、西行妖～（後書き）

第2?話どうだったでしょうか？

おそらくこの小説では塵が一番苦戦したのがこの西行妖になると思います。

それほど苦戦しています（能力の制限をされているのもありますが）

また次は時代が大きく跳びます。もともと時代は吹っ飛ばそうと思ったいたのですがいつまで書いてもそこにたどり着けそうにないので予定よりも早くとばしました（笑）

こんな駄文小説ですがよろしければこれからも読んでいただけるとうれしいです

第2語話　～博麗大結界前編～（前書き）

どうも筆者の箪笥です。

前回のあとがきで書いたとおり話が一気に飛びます。
開始時期はサブタイトルで察している方も多いと思いますが、
博麗大結界が張られる少し前からです。

時代が飛んでも低クオリティ

それでは第2語話　どうぞ

第2語話　～博麗大結界前編～

博麗大結界

博麗大結界は常識の結界であり幻想郷と外の世界の常識を入れ替える（幻想郷の常識を外の世界の非常識にし、外の世界の常識を幻想郷の非常識にする）ことによって幻想郷と外の世界の往来を遮断する結界である。
またこの結界はとても強力で妖怪であっても簡単には通ることができない。裏を返せば一部の者は幻想郷と外の世界を往来できる。
ただ、仮に出れたとしても力の弱い妖怪は幻と実体の境界によって幻想郷に引き寄せられてしまうのだが。

これはそんな結界をめぐって起こる出来事の話である。

○

「ふ～、こんだけ大きな結界を張るとなると大変ね～」

「何言ってるんですか。幻と実体の結界を張った時も今回の結界も紫様は殆ど何もしてないじゃないですか！」

「あら？なんのことかしら？口を動かしている暇があるなら作業を

しなさい？」
紫はフフッと笑いながらごまかす。
「・・・もういいです」
はぁと溜息をつきながらあきれる藍
「しかし、これだけ大きく、更には幻想郷と外を出入りできないとなると反対する妖怪も多いのでは？」
藍は紫に尋ねる。
「まあ少なくとも反対団体はできるでしょうね。もし争いが起きても妖怪同士が賛成反対を争ってくれるならいいのだけどもし反対団体の攻撃が人に向かったら最悪ね、人間ばかり贔屓にするわけにもいかないし、かといって無視しても人間が居なくなって妖怪も全滅するわ」
でも、と紫は続ける。
「でもこの結界を張ることはとても重要のことなの。それだけのリスクを負ってでもね・・・」
「何も無いことを祈ることしかできないのでしょうか・・・？」
「強力な助っ人が居ればいいのだけれどもね・・・あいつのような・・・ね」
「あいつ・・・とは塵さんのことでしょうか？あの桜を封印してから忽然と姿をくらませてしまった」
「居ない人を頼ろうとするだけ無駄だわ。今できる最高の結果になるように頑張るのよ」

地上最強と呼ばれた妖怪は――――

まだ姿をくらませたまま現れない。

○

「くっ・・・ッ！」

八雲紫は名もしらぬ大妖怪３匹を相手に苦戦していた。

（参ったわね。まさか結界の準備にこれほどの妖力を持っていかれるとはね・・・藍もすぐには来そうにないし、この状況でこいつら相手に戦うのも分が悪い。かといって逃げ出せば今まで作ってきた結界の術式が無駄になる。本当に参ったわね・・・）
紫はあせっていた。結界完成目前にして危機を迎えているのだ。

（少なくとも藍が来るまで時間を稼ぐしかないようね）
紫は大妖怪の動きに注意しながら能力の発動の準備をする。
いつもは感覚的に行える能力の発動も妖力を結界に持っていかれているせいでうまく発動できないのだ。

「オラオラ！妖怪の賢者様がこんなことでくたばんのかぁ！？もっと楽しませてくれよ？」
大妖怪の一人がそういいながら殴りかかってくる。

とっさに準備していた能力を使うと大妖怪の手の動きに合わせるようにスキマが出現する。
そのまま握られた拳はスキマに飲み込まれる。はずなのだが

「んなもんお見通しだぜぇ！」
妖怪は振りかぶっていた拳を真っ直ぐではなく自分の左に放ち、その勢いで回転しながら裏拳を放つ。

「っ！？」
予想していた場所と違う場所に出された紫はとっさに後ろに下がる

「おいおい。俺達のこと忘れてないか？相手は一人じゃないぜぇ！」
紫が跳んだ場所に待ってましたとばかりに蹴りを放つ。

「なっ！」
蹴りを避けれなかった紫はそのまま吹き飛ばされ木に衝突する
「ガハッ！？」
衝突した勢いで肺に残っていた酸素が一気に吐き出される。
「へへっ・・・ざまねぇな！妖怪の賢者さんよぉ！」
もう一匹の妖怪が手に持っていた棍棒を振りかぶる
（まず・・っ！）
思わず恐怖で目を瞑ってしまう。頭で目を瞑っても避けることはできないと理解していても。
そして覚悟した。次来る一撃を。それでも誰かが助けてくれるという淡い期待は捨てられなかった。
妖怪の賢者は最後にこう思う
（私らしく・・・ないわね・・・。ごめんなさい・・・）
徐々にちかずいて来る棍棒の音が聞こえる。
その一瞬はとても長く感じられた。数秒、数十秒、数分・・・
そして――――

来るはずの衝撃がこず恐る恐る目を開ける。そこには

「ぐぎゃあああっ！？」

真っ二つに切られた棍棒を持っていた妖怪と

「遅れてすまんな」

数百年前姿を消した妖怪の姿があった・・・

第2語話　～博麗大結界前編～（後書き）

第2語話どうだったでしょうか？

まあ展開は良くありそうな感じですね（笑）

なんというか・・・まあこういうシーンが書きたかっただけ

前編後編に分けたのは前編後編という響きが好きでやりたかっただけという救いようの無い理由。これじゃあいつ視聴者の方にピチューンされるか分からないね

誤字脱字や感想、批判、アドバイス等ありましたらいつもどおりお待ちしております

第２ｓｉｘ話　～博麗大結界後編～（前書き）

どうも。筆者の箪笥です。

今回はどうも内容の薄いものとなってしまいました・・・

「前後半なんかに分けるからだろ」

うっ・・・外野から変な声が聞こえたがキニシナーイキニシナーイ

それでは第２ｓｉｘ話どうぞ

第２ｓｉｘ話　～博麗大結界後編～

ｓｉｄｅ　紫

「遅れてすまんな」
懐かしい声とその姿を見て私は確信する。
そう、彼が帰ってきたのだ。伝説の妖怪と呼ばれた彼が。
彼の名は異界　塵。
「・・・大遅刻よ！」
笑いながら私は彼にそう返事を返した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　塵

俺は長い眠りから目を覚ました後すぐに場所探知を使った。
現在の状況をするために紫と話すついでに能力が正しく作動するか
確認したかったのだ。
そして風の力で紫の下へ移動した。

すると紫が今にもとどめをさされそうになっているではないか。
仲間がやられるのを見ているだけなんてことはできないので

「遅れてすまなかったな」
と、妖怪を攻撃するついでにずっと眠っていたことを謝った。

「・・・大遅刻よ！」

「ふむ・・・まあ話したいことは沢山あるが先ずはこいつを蹴散らすことが先か。」

「ケッ！誰が俺様をけちらすだぁ？妖怪の賢者と呼ばれる八雲にここまで追い詰めたのは俺達だぜ？その俺達に一般妖怪のお前が勝てると思ってんのかぁっ！？」
先ほど真っ二つにした妖怪の仲間がほえる。

「・・・無知は罪なりって言葉知ってるか？俺と仲間に喧嘩売ったことをあの世で後悔するんだなッ！」
さあ、楽しませてくれよ？

○

「ふん。暇つぶしにもならんやつだったな。・・・まあ5秒もっただけいいほうか」

「相変わらず貴方はやることが違うわね・・・いい意味でも悪い意味でも」

「ああいうやつらにはこれぐらいが丁度良いんだよ。・・・それでどういうことだ？お前がわけなくあんな奴らにやられる筈が無いと思うんだが」
一番木になっていたことを話す。別にあいつらを5秒で葬るのは俺じゃなくてもできる。本当にその程度の相手だったのだ。そんな相手に紫があそこまでやられる筈が無い。

「仕方ないじゃない。結界に力を殆ど持っていかれてるんだから。」

「結界・・・？ああ・・・なるほどね」
今の会話で大体分かった。幻想郷にはある二つの結界が張られる。
一つ目は「幻と実体の境界」で幻想入りの要になる結界である。
二つ目は「博麗大結界」で幻想郷と外の世界の行き来を制限する結界である
紫の言う結界は恐らくこのどちらかだろう。
そして結界を張る隙を突いて妖怪が襲ってきたということは自分達に害がかかるということが明確なほうだろう。
幻と実体の境界は幻想郷にいろいろな者（人や文化ふくめ）が入ってくる結界なので自分達に害は無いと判断するだろう。
しかし博麗大結界は外との行き来を封じられてしまう。そうなると外の人間が襲えなくなるのでとても害が無いと言えない。

以上のことから現在は博麗大結界が張られる前後・・・つまり１８８５年辺りである。
・・・自分は数百年ではなく千年ほど眠りについていたのかもしれない。

「まあ・・・本当にすまなかったな」

「いいわよ。別に貴方が長期間姿を消すのは珍しく無いことだし。ただ・・・今回は理由が理由だから少し心配したのよ？」

「能力の暴走・・・ねぇ・・・」
自分でも自覚しているつもりだった。この能力が蜜であると同時に自分に毒である事ぐらい。
なのに今回のような対処しか取れなかった。もっといい方法は無かったのか？

などと考えていると

「さて・・・準備は終わったわね。あとは儀式をするだけよ」

「ん？意外と早く終わるんだな」
そうたずねると

「まさか。そのほかの準備に沢山時間をかけてるわよ」（主に藍がだけどね）
最後に紫が何か呟いたが聞き取れなかった。
ただ、なんとなく聞くとめんどくさそうなことになりそうなので聞くのは止めておく。

「それじゃあ・・・メンバーを集めましょうか」

○

１８８５年明治１８年度、幻想郷に博麗大結界が張られ幻想郷の外から姿を消した――――

「で、結界が張れたわけだがこれからどうするんだ？絶対に反抗する妖怪が居るだろう。数匹が反乱を起こす程度なら問題は無いが大

規模となるとめんどくさいことになるぞ？」

「そう、それが問題なのよ。何も考えてないわけじゃないのだけれど人間と妖怪が対立するとなるとめんどくさい事になるのよねぇ・・・」

「だったらあえて結界を張ったのは人間ではなく妖怪だって言っちまえば良いんじゃねぇか？そうすれば少なくとも今回の件で人間には被害でねぇと思うが」

「そう上手くいけば良いのだけれどね」

「考えすぎても疲れるだけだぞ。少し休んだらどうだ？気分変えればいい考えも思いつくかもしれないぞ？」

「そうね・・・そうさせてもらうわ。結界張ったりしてつかれちゃったわ」

「そうか。俺は幻想郷を見て回ることにする。久しくあってないやつにも会えそうな気がするしな」

こうして俺達は別れた。さて、どこから行きますかね？できるだけ花がありそうなところは最後に行きたいんだがな。

第２ｓｉｘ話　～博麗大結界後編～（後書き）

第２ｓｉｘ話どうだったでしょうか？

今回最後にフラグのようなものを立てましたが回収するかは不明です。

いろいろと突っ込みどころが多いかもしれませんが気にしたら負けです。

いつもどおり感想、批判や誤字脱字、アドバイスなどありましたらお待ちしております

第２?話　～吸血鬼異変～（前書き）

皆様、久しぶりでございます。筆者の箪笥です。

このたびは１ヶ月以上も放置して申し訳ありませんでした

（何回目だよこの謝罪）

テストが終わってから書き始めたのですがなかなか上手く書けず書き直してたりしたらいつの間にかこんなことになってました。

というか塵の設定が書き始めた頃とだいぶ違ってきてるから良く分からんことになっておりますｏｒｚ

そんな低クオリティな小説ですが読んでいただけたら幸いです。

それでは第２?話どうぞ

そういえば前話で立てたフラグ回収してないなぁ

第2?話　～吸血鬼異変～

よろしい。ならば戦争だ

え…どうしてこうなったし。

吸血鬼異変とは

博麗大結界などのせいで妖怪たちは人間や巫女などを襲えなくなったことで妖怪たちが弱体化し始める。
そんな妖怪の気力が下がっていく一方の幻想郷に吸血鬼が現れ始める。
その吸血鬼たちは強い力を持っていたため気力が下がっている妖怪を手下にし幻想郷を支配しようとする異変である。

まあそんなことをしたら紫が黙っていないわけで。
で、紫のサポート係の俺は半ば強制的に戦わさせられるわけで。

「正直この程度の異変だったらお前だけで十分じゃないか？」
「あら？そうかしら。一人で拠点を守りながら敵本陣を攻めるのは大変なのよ？」
「…どうせお前は防衛役とかいって拠点に居座るつもりだろ？」
「さあどうかしらね？」
「はいはい。分かりましたよ」
因みに博麗大結界が張られてからこの異変が起こるまで約１００年である。
その間に幽霊移民計画とか言って冥界拡張したり、何かを悟った妖忌が白玉楼去ったりとまあいろいろあったが省略させてもらう。
「そういえば・・・貴方今日は刀を使わないのかしら？」
「あん？こんな異変この扇子一本で十分。刀を使うまでも無い」
「…本当にそんな装備で大丈夫なのかしら？」
「大丈夫だ。問題ない。…これで十分戦えること証明してやるよ」
俺は近くにあった木に近づき扇子で「ちょん」と叩く。
するとそのあっという間にその木は倒れてしまった。しかも叩いた部分はただ折れているのではなく空間ごと切られている。
「…貴方って本当にやることがぶっ飛んでいるわ」

「褒め言葉として受け取っておく」

「はぁ…で、どうやって攻めるのかしら？それなりに数は多くて散らばっていると思うけど」

「こうやるんだよ」

パチンッと指を弾く。

「何も起こらないじゃない」

「いや、お前に見えないだけさ。あの森一帯に幻術を仕掛けた。３０分もすれば追い込まれた蟻みたいに本拠地に集まってくれると思うぜ。」

「貴方にしてはやり方が回りくどいじゃない。いつもならさっさと敵の総大将の前まで飛んで制圧してくると思ったのに」

…俺ってどんな見かたされてるんだろう

「まあ偶にはこういう戦い方も良いかなってな。それに吸血鬼とならそれなりに楽しめそうだからな」

「そんなことといって失敗しないで頂戴よ？」

○

ヒャッハー！戦争じゃぁぁぁ！

２０分待つといって結局めんどくさくなって１０分しか待たずに出撃した。

なんというかがっかりだ。所詮吸血鬼といってもこんなものか。

「残すところはあと本陣だけか」

「ええ、そうね」

ニュッとスキマから出てきて紫がそう返す。

「もっとましな登場の仕方は無いのか・・・？」

別に文句を言うつもりは無いが現れ方ってもんがあるでしょうに

「ないわ」

即答された。まあいつものことだが

「まあいい。ほら、もう着くぞ」

そういいながら飛んでいるとそこには見事に紅い色の屋敷があった。

「・・・やっぱり貴方の運命は操れないようね？妖怪さん」

「歓迎の言葉がそれってのも悲しいもんだがな」

「当然よ。歓迎してないもの」

「さいですか」

会話している相手はどう見ても幼女体系の吸血鬼、レミリア・スカーレット。

世間じゃノンカリスマだとか言われてるけどそう言ったやつ出て来い。どう見てもカリスマあるじゃねーか。

寧ろ体の9割がカリスマでできてるんじゃねーのか？・・・さすがにそれは嘘だけど。

と、心底どうでもいいことを考えていると

シュッと空気を切るような音と共にレミリアの姿が消える。

否、消えたのではない。「本来なら」肉眼では捉えられないほどの速さで迫ってきているのだ。

それを見た俺は体を反らして避ける。相手は長い間生きた吸血鬼、当然初撃を避けただけで終わるはずもなくそのままの体制で腕を横に振り追撃をしてくる。

だがそれは予想済み、迫ってくる腕を掴む。

「なっ！？」

「おいおい、まだ交渉内容《罰ゲーム》を決めてねえぜ？そうあせんな」

そう言い腕を掴んだてを上に上げる。腕を掴まれていたレミリアは宙に飛ぶ。が、そのまま落ちることはなかった。

羽、吸血鬼といえばこれ。というランキングがあるなら間違いなくＴＯＰ５には入っていそうな体の一部の羽を使って地面に落ちる前に跳んだのだ。

「あら、そういえばそうね。まあ分かってるとは思うけど私達の目的はこの場所の支配、私が勝ったら私に従ってもらうわ」

「俺達は・・・そうだな俺が勝ったら俺達の言うことを聞いてもらおうか」

「それじゃあ・・・はじめましょうか」

時は既に深夜、満月が昇る夜、二つの影がぶつかり合った。
それは戦いの始まりを意味していた。

ｓｉｄｅ　三人称

２つの影が何度も交差する。しかし、その交差には刀と刀がぶつかった時起こるような音はしない。
そう、２つの影は交差する時ぶつかり合うのではなく相手の攻撃を避けながら攻撃をしているのだ。

（あの扇子…ただならぬ力を感じる。あんなものに触ったら間違いなく負ける。此処は避けて攻撃するしかないわね）

そう、この方法に持ち込んだのはレミリアのほうである。
レミリアも伊達に長く生きているわけでいない。見ただけでもあの扇子の危なさは判別できる。
そんな風に何度も交差するたびに塵に僅かに隙が生じた。
（畳み掛けるなら今ッ！）
ズサササササッ
と何かを切り裂くようなおとが辺りに響く。
普段の塵を知っている人なら塵らしくないと口をそろえて言うだろう。
血があたり一面に広がる
「どうよ？まだやるのかしら？」
勝ち誇って宣言するようにそう言う。
勝負あった。誰もがそう思っただろう。
そう、相手が塵でなければ。

「で、質量のある残像ぶった切って何喜んでんだ？それともそう言う趣味ですか」
普通なら出血死していそうな量の血を流した塵が喋ったと思ったら塵はちりの様に消えてしまった。

「なっ！？」
レミリアは驚いて周囲を見渡す。が、塵の姿は見当たらない。
体制を立て直そうと後ろに下がろうとした瞬間

「バーカ、どこ見てんだぁ？」
レミリアが下がろうとした位置に塵は立っていた。

「まあいい。…死にたくなければ動くなよ？話し合いで解決できそうなやつはあまり殺したくないからな」
塵が手に持っていた扇子を開きスッと振るう。
すると

ヒュンという音がしたかと思うと扇子からでた「それ」はレミリアの顔の横を通過し、そのまま後ろの木に当たった。
そしてそのまま木が倒れる

はずだったのだが

なんとその木はまるで溶けるように消えてしまったのだ

「な・・・？」

絶句するレミリア

「驚いたか？この扇子には能力がある」
落ち着いた様子で答える塵

「能力？」
紫が塵にたずねる

「ああ、そうだな・・・【消し去る程度の能力】と言った所か？まあ霊力でも妖力でも良いから使用者の力が一定以上ないとただの扇子だがな」

「くっ・・・！まだよ！」

「もう一度言う。話し合いで解決できそうな問題を殺して解決したくない。死にたくなければあきらめろ」

「誰があきらめるって！」

「そうか・・・これが最終警告だ。死にたくなければ動くな。そして負けを認めろ」
塵が再び扇子を2，3度振るう。すると先ほどとは比にならない量の光線が飛んでいく。
そう、動かなければまったくあたらない位置へと。

「・・・警告警告って、吸血鬼なめてんじゃないわよ！」
まともに戦わない塵に怒ったのかレミリアが塵に突っ込んでいく。

「そうか、残念だ。」
そういうと塵の姿が一瞬ぶれる。

そして、

周りで見ていた紫、レミリアの従者、戦いを見ていた野次馬、そのだれ一人がその瞬間を見ることができただろうか。

そう、塵は辺りの一同がその瞬間を捉えることのできない速度でレミリアの後頭部辺りに扇子で一撃を入れたのだ。

「がはっ・・・！？」

「だから言っただろ、最終警告だって

そしてこの吸血鬼異変は、塵のあっけない一撃で幕を閉じたのであった。

第2?話　～吸血鬼異変～（後書き）

第2?話どうだったでしょうか？

さっさと時間を進めたいので一話一話がハイペースなのは御了承ください。

と言うかこんなにこっちの更新もできてないのに新しい小説も書き始めようとしているばか者です↑

こんな筆者ですがどうぞこれからもよろしくお願いします。

いつもどおり感想、批判、アドバイス、誤字脱字等ありましたらよろしくお願いします

第2ハチ話　～スペルカードルールと異変の兆候～（前書き）

どうもお久しぶりです。
某サイトで放送したり絵を描いてたり
何度も書き直していたらこんなに送れてしまいました・・・

今話の内容を書き直してるうちにまったく違うものになっていた
どうしてこうなった

久しぶりの投稿なのにとても短いなぁ・・・

そんな第2ハチ話　どうぞ！

第2ハチ話　～スペルカードルールと異変の兆候～

「よっと・・・小さいな　リリース」
ピチャッと今釣った魚を川に返す。

「どう？釣れてるかしら？」
いきなり後ろから話しかけられる。声からして紫だろう。
まあスキマが出てきた時若干妖気がもれていたのでいたのは分かっていたが。

「まあ小さいのばっかだな。小さいのは川に返してる。だからバケツにいっぱいってわけじゃないな」
小さい魚はリリースすれば成長して大きくなるから釣りが楽しくなる。

「そうかしら？十分すぎるほど釣っていると思うけど」
紫がバケツの中身を見ていう。

「そうか？俺にとっては少ないけどな」
しゅっと糸を川に再び垂らす。

「あら？・・・フフッ、これは太公望もびっくりね」
紫が竿を見て言う。

まあそれもそうだろう。この竿は少し丈夫な木の枝に霊気の糸をくくりつけているだけなのだから。
つまりどこぞの故事の太公望みたいに針と餌がついていないのだ。
尤も太公望は釣りをしていたと言うよりもその国の王に目をつけられる様に釣りをしているように見せかけていただけらしいが

「これでもコツをつかめば釣れるんだよ。・・・まあ霊力やら妖力やらを自由に扱えなきゃ無理だがな」
「・・・それで何のようだ？別に釣りを見に来たわけでもないんだろ？」

「・・・そうね。本題に入りましょうか。簡単に言うわ。幻想郷での戦い方が変わったわ。」

「何だそんなことか。その戦い方ってのはスペルカードルールだろ？」

「あら？情報が回るのが早いわね？」

「まったく・・・俺をだれだと思っているんだ？その会話は聞いてたぞ」
能力をちょこっと使えばそれぐらい何のわけもないわ。

「結構強力な結界を張ってはなしあったのにね・・・やっぱりあなたにはあの程度の結界じゃ無理ね・・・」

「まず俺を結界程度で押さえようってのが愚の骨頂だな」
正直俺の能力なら基本的に何でもどうともなる。

「それもそうね。・・・そういえばあなたは話し合いを聞いていたのよね？じゃあスペルカードはもう作ってあるのかしら？」

「ん？まあな。４，５枚だが作ったぞ？まあいつ使うかは分からんがな。・・・そういえば他に作ったルールはどうなったんだ？複数作ったんだろ？」

「他のは・・・無理ね。流行りそうにないわ。あくまで遊びだから単純さとかで言ったらスペルカードルールが一番みたいよ」

「ふーん・・・まあいいか。一つで統一できそうならそれを妨害する意味も無いだろう」

「そうね。そのほうが覚えやすいだろうし」

その時だった

サササーっと紅い霧のようなものが流れてきた

「なんだ。もう行動を起こすつもりか」

「・・・何のことかしら？」

「どこかのばかが性懲りもなくまた異変を起こすみたいだぞ？」

「・・・分かってるなら事前に止めてくれてもよかったじゃない」

「どうせほおって置いても博麗の巫女が解決に行くんだからいいじゃねーか」

「まああなたらしいけどね・・・さて、私は行くわ。この異変が幻想郷にどう影響があるのかも考えたりしなくちゃいけないし。」

「ん、そうか。俺はもう少しここで釣ってるつもりだから困ったらこいよー」

俺の言葉に対して紫はスキマに入りながら「そうさせてもらうわ」

と言っていた。

さてもう少し釣りをするかね。
恐らく紫が来るのは異変が終わった後だろう。それまで釣りエンドレスというのもいいじゃないか。

こうして日常のようで非日常な日々は流れていく。
この異変がその非日常にどうかかわるのか。楽しみにさせてもらうぜ？

第２ハチ話　～スペルカードルールと異変の兆候～（後書き）

第２ハチ話どうだったでしょうか？
大分短いですね　はい
上手く書けなくてモチベが全然あがらん・・・
ひどい時なんかメモ帳開いて内容考えてるうちにメモ帳閉じてますからね・・・
それとＳＡＩを使って絵を描いたら意外と楽しかったというのも問題ですね
どうしても意識がー　よろしければＰｉｘｉｖに投稿してあるので見てください
さて次話の構成どうしよう。どうしよう
こんな筆者ですが今後ともよろしくお願いします。

感想や批判アドバイス誤字脱字などありましたらいつも通りお待ちしております

第2?話　～紅の少女・前編～（前書き）

どうもお久しぶりでございます・・・
まずは一言「非常に申し訳ありません！！」
このやり取りも何度目だよと突っ込みたくなりますが。
いつも通り言い訳を言わせて貰うと実を言うと今年受験生なんですよ・・・
なので中間テストなどは絶対に落とせない＝勉強しなきゃいけないいつも一夜漬けで何とかしてた自分ですがそろそろ真面目にやらんといけない
時期なんですよね・・・
そして言い訳はもう一つ
実はここのシーンは書き手を始める前から書いてみたかったシーンなんです。
あまり取れない時間で何度も設定変えたりしてたのも遅くなった原因のひとつです
こんな亀投稿な自分ですがそれでもこんな二次創作を見てやってもいい
という方はこれからもよろしくお願いします。
それでは第2?話　～紅の少女・前編～どうぞ！

第2?話　～紅の少女・前編～

「塵?いるかしら?」
呼びかけてみるが返事がない
そのまま前に彼が釣りをしていたころまで歩く・・・が、そこには誰もいなかった。

「あら?これは何かしら?」
よく見ると切り株の上に手紙がおいてあった。

その内容は
『恐らくお前がこの手紙を見るころには俺はここにいないだろう』

「・・・塵らしいことするわ・・・?裏にも何か書いてある見たいね」

『PS．別に死んだりしたりするわけではないのがっかりするな』
その文をみて　ふふっ　と笑う紫だった。

○

「ったくやっぱこういう仕事が俺に回ってくんのか。確かにあいつを倒すだけなら巫女とか魔法使いにもできるが条件つきとなると俺ぐらいしかできないか」

「だが・・・非日常とは言い切れないな。条件つきなだけでいつもの仕事とかわらねぇな」
そういいながら階段を下りて行く。降りて行くにつれて暗くなっていくのが分かる。
此処はどこかというと前に戦った吸血鬼であるレミリアスカーレット、スカーレット家が住む館の紅魔館の地下へと続く階段である。
因みに紫からの指令は「紅魔館の地下にいるレミリアの妹が危険か判断すること。また、危険と判断した場合は危険な理由を排除すること」である
つまりは紅魔館の地下の危険分子を取り除けばいいということだ。
そんなことを考えていたら最下層までついていた。
「こりゃまたたいそう立派な扉だこと」
ぱっとみ高さ6メートル　横幅5メートルだ　これは扉というより一種の門だ
「しかもこれ魔法で封印施されてるじゃねぇか」
これはもう自ら危険ですって言ってる様なもんだ。まあ俺には封印程度関係ないが。
「さてさて、入らせてもらうぜぇ」
キ・・・キキィー　と扉が開いていく。
するとそこには一人の少女が立っていた
「おにいさんはだぁれ？」
少女はそういう

「俺か？そうだな新しい遊び係とでも言っておこうか」
「遊び係？じゃあ遊んでくれるの？」
少女は瞳を輝かせながら尋ねる
「まあな。何して遊ぶか？」
「弾幕ごっこ！」
少女は即答した
「じゃあお互いに自己紹介と行こうか。俺の名前は異界　塵だ」
「私の名前はフランドール・スカーレット！じゃあおにいさん・・・簡単にコワレナイデネ？」
コワレナイデネ？か面白いじゃねぇーか
「いっくよー！『禁忌「クランベリートラップ」』」
フランドール・・・長いからフランがそう宣言するといくつかの魔方陣のようなもが現れた。
するとそこから弾幕が発射される。
だが甘い。これくらいの弾幕だったら避けることは余裕だ。
この弾幕は基本的におなじ動き。あせらなければ簡単に取得できる。
一切攻撃せずに避けていると弾幕がいっせいに消える。タイムアップだ
「お兄さんなかなかやるね！これならどうかな！？」

『禁忌「レーヴァテイン」』

スペカが発動するとフランの手には大きな剣が握られていた。

「そぉれ！」

それをそのまま振り回す。

剣の動きは比較的単純なので避けやすい。

だが問題なのは避けた後だ。なぜなら剣の移動した場所に炎の弾幕が発生するのだ。

ただ単に剣と弾幕のワンセットを避けるだけなら簡単だ。

だが剣を振ってくるのが１度だけなわけがない。

レーヴァテインの動きに注意しながら発生する弾幕の間を弾幕の流れに逆らって避けて行く。

再び弾幕が消える。タイムアップ。

「むー、これならどうだ！」

『禁忌「フォーオブアカインド」』

スペカが発動された。するとフランが４人に分裂・・・いや、分身といったほうがいいか。

４人に増えたフラン全員がいっせいに放ってくる。

最初は小玉を円状に、そして途中から中玉も混じってくる

だが・・・避けれる！

「ふん・・・まだまだだな」

弾幕が消えタイムアップを告げる
と、そこまで連続攻撃を仕掛けていたフランの手が止まる。

「・・・お兄さん何しても同じ顔だからつまんない。これをやったらおどろいてくれるかな？アハハハ！」
あの構えは・・・

「ぎゅっとして・・・」
！？能力かッ！
とっさの判断で横に跳ぶ

「ドカーン！」
その瞬間文字通りドカーンという音を立てて壁の一部が崩れた・・・
いや破壊されたと表現したほうが正しいか
彼女の能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」である。
これほどまでの破壊力とは・・・予想以上だな・・・

「アハッ　やっと驚いてくれた。まだまだいくよー！今度は逃げても無駄なんだから！ワタシヲタノシマセテネ？」
その言葉と共に膨大な殺気が叩き付けられる。常人ではこれだけでも死んでしまうのではないかという量だ。

「ぎゅっとして・・・ドカーン！」

グシャッという嫌な音が響く。そしてターンっと扇子が落ちた音が部屋の中を木霊する。
そう、破壊されたのは人の腕、それも肩から先の部分。
その破壊された腕が俺の右腕と気づくのに時間はかからなかった。
「・・・」

「・・・お兄さん　ホントウニツマラナイ！」
フランが怒鳴る。こうすれば俺がわめき叫ぶと思ったのだろう。
いや、実際に他の人間にやってわめき叫ばしたのだろう。
彼女が怒っている理由は明白だ。自分の思ったとおりの反応がないからだろう。
生半可に精神力の強い人間がたまたま弾幕を避けて、ぼろぼろになったところをこうやっていたぶった時の反応が彼女にとって楽しいのだろう。
それは人間の子供が蟻の巣に水を入れたり、蝶の羽をもぎ取ったりトカゲを弄り回したりするのと同じ感覚なのだろう。
そういう純粋さを彼女は持っている。それゆえの危険性、そして長時間の幽閉

「ツマラナイツマラナイ　セメテバラバラニナッテワタシヲタノシマセテ！」
狂気に満ちた声、人格
「ギュっとシテ・・・」
力だけでどうにかなるということではない問題
「ドカーン！」
グシャッ
俺の左肩から先が吹き飛んだ。

「ドカーン！」
右足が吹き飛んだ。
体のバランスを失い地面に倒れる

「ドカーン！」
左足が吹き飛んだ

「ドカーン！」

胴体が吹き飛んだ
辺りが血まみれになる。

「ハァ・・・ハァ・・・」
少女は肉塊を少しの間見下ろすと無言で歩き出した・・・・

第2?話　～紅の少女・前編～（後書き）

第2?話どうだったでしょうか？
見ての通り前半は塵のターン、後半はフランちゃんのターンとなっております。
結構派手にやられる塵というのは珍しいですよね
（というかココで入れないともう次が無い気がした）
心理描写というのは難しい。皆さんが思ってるキャラと大分ずれたかもしれません
（元々そんな原作に沿ったようなキャラを作れてるとは思えませんが）
もしよろしければ次の話もお楽しみにください

感想、批判、更新おせーぞ、アドバイス、誤字脱字等ありましたら言ってくださるとうれしいです

いったい塵はどうなってしまうのやら

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4837n/

東方適応志

2011年10月26日04時10分発行